

「御仕置例類集」に見る親族間の犯罪

市
川
訓
敏

目次

- 一 はじめに
- 二 「親属相為容隠」
- 三 「依父之科御仕置ニ成候類」
- 四 「女之部」
- 五 「主従親族等ニ拘候もの之部」
- 六 おわりに

一 はじめに

親族間にかかわる犯罪について、現行刑法は、第二四四条の親族相盗例に見られる財産犯に関する規定とともに、刑事司法作用を妨害して国家的法益を侵害する犯人蔵匿罪や証拠隠滅罪について、親族間の犯罪に関する特例として、第一〇五条を置き、

前二条の罪については、犯人又は逃走した者の親族がこれらの者の利益のために犯したときは、その刑を免除することができる。

としている。

この第一〇五条は、平成七年法律第九一号により、口語的な表現に改められたもので、旧条文は、

前二条ノ罪ハ犯人又ハ逃走者ノ親族ニシテ犯人又ハ逃走者ノ利益ノ為メニ犯シタルトキハ其刑ヲ免除スルコトヲ得

であり、さらに制定当初の旧規定は、

本章ノ罪ハ犯人又ハ逃走者ノ親族ニシテ犯人又ハ逃走者ノ利益ノ為ニ犯シタルトキハ之ヲ罰セス

であつたのを、昭和三二年法律第一二四号により、「之ヲ罰セス」を、「其刑ヲ免除スルコトヲ得」と変更され、さらに昭和三三年法律第一〇七号に、一〇五条の二項〔証人威迫罪〕が新設されたことで、「本章ノ罪」を「前二条ノ罪」に改正されたものである。⁽¹⁾

戦前の旧規定が、「之ヲ罰セス」としたことの刑事学的な意味について、仲家暢彦氏は、「父は子のために隠し、子

は父のために隠す。直きことその中にあり」という、論語子路篇一三にある儒教思想及び大陸法系諸国の刑法における同種の規定の影響によるものであり、それが「其刑ヲ免除スルコトヲ得」という新規定に改正されたのは、一般に親族間の行為を免責しない英米法の影響により、親族の庇護という家族的倫理よりも国家の刑事司法への協力という公民的倫理を優先させる思想にもとづくという理解が一般であるとしている。⁽²⁾

この見解は、ほぼ大塚仁氏の説を踏襲したものと思われ、大塚仁氏は、この問題について、さらにいくつかの関連する問題を検討している。⁽³⁾

団藤重光氏は、「旧規定は『父は子のためにかくし、子は父のためにかくす。直きことその中にあり』という儒教思想がもとになっていた」としつつも、その注において、「従来の規定は律の系統のほかに大陸法系（フランス刑法〔旧〕二四八条二項（——現六一条・一〇〇条）、ドイツ刑法〔旧〕二五七条二項（——現二五八条六項）、ドイツ一九六〇年案（・一九六二年案）四四七条六項など）にもよりどこを有するものであった」としているから、大塚、団藤の両説の間には、ほぼ見解の相違はないと考えることができる。⁽⁴⁾

もつとも、東洋の儒教思想にもとづく律の系統の規定と西洋の大陸法系の規定とが、外形的に同一の効果を発生させるとしても、その背景や趣旨、意図するところは、それぞれの家族のあり方や家族倫理が異なる以上、おのずから全く別の根拠にもとづくことが予想される。

前田雅英氏は、この問題の、親族についての特例の注において、「なお、一九四七年の改正前は、『之を罰せず』として犯罪は不成立とされていた。『父は子の為に隠し、子は父のために隠す。直きことその中にあり』という論語の教えにあるように、身内に関する犯人蔵匿や証憑湮滅は『正しい』行為とすら考えられていたのである」と、指摘し

ている。⁽⁵⁾

先の団藤重光氏も、その注において、「律令系の法制では、明治初年の新律綱領あたりでさえも、近親者ことに尊属を告訴することは罪とされたくらいである」としている。⁽⁶⁾

団藤重光氏の指摘は、明治三年一二月に頒布された『新律綱領』訴訟律にある「干名犯義」において、

凡子孫、祖父母・父母ヲ告ゲ、妻妾、夫及ビ夫ノ祖父母・父母ヲ告ル者ハ、実ヲ得ルト雖モ、徒二年半。誣告スル者ハ、絞。……

とあり、さらに、三等親、四等親、それぞれの尊長（本人から見て目上の人）を告発する場合についても、その告発が真実であったとしても処罰し、また偽って無実の者を誣告したときには、絞首刑以下の重罰に処するとして、さらに夫婦その他の親族関係や、奴婢、雇人関係の告発や誣告についても詳しい規定を設けていることを指すものと思われる。⁽⁷⁾

本稿では、これら先学の指摘に導かれながら、江戸時代の「親族間の犯罪」について、「実質上江戸幕府最高裁判所の刑事判例集」と平松義郎氏が評されている『御仕置例類集』を素材に、いくつかの検討を加えるものである。⁽⁸⁾

二 「親属相為容隠」

『御仕置例類集』は、その編纂時期によって、第一集から第五集に分けられ、第一集の「古類集」は明和八年（一七七二）から享和二年（一八〇二）までの三二年間の三〇冊、第二集の「新類集」は享和三年から文化十一年（一八一四）までの一二年間の三一冊、第三集の「続類集」が文化一二年から文政九年（一八二六）までの一二年間の三七

「御仕置例類集」に見る親族間の犯罪

冊、第四集の「天保類集」が文政一〇年から天保一〇年(一八三九)までの一三年間の六五冊、第五集の「新新類集」は、天保一一年から嘉永五年(一八五二)までの一三年間の七九冊があったが、最後の第五集は、関東大震災で失われた。

いずれも、幕府評定所の刑事裁判にかかわる評議書を編纂したもので、各奉行から先例になく、決しがたい事件の伺いが寄せられると、それに関して、老中が評定所一座に評議させ、その評議書をもとに回答したが、とくに八代將軍徳川吉宗が、享保の改革の一環として編纂した『公事方御定書』が、刑政の基本法典とされて以来、『公事方御定書』に照らして、なお決しがたい事例を中心に、評定所一座が検討した結果を評議書にまとめ、老中に答申したが、それら評議書と老中の回答を、その時々編纂したものが、『御仕置例類集』であり、幕府刑政の實際を、かなり具体的に読み取ることができる。⁽⁹⁾

『御仕置例類集』は、武士、百姓町人、僧侶神職、女性、老人、幼年もの、穢多非人などの身分別に編成するとともに、人殺し、附火、博奕、狼藉など、ある程度、犯罪類型に応じて細分類をおこなっているが、いずれも大部にわたるので、それらのなかから、「親族間の犯罪」にかかわる事項のうち、「取計之部」の「依父之科御仕置二成候類」、「侍・出家・社人・御用達町人・小もの等之部」のなかの「主従親族等二拘候もの之類」、「女之部」のなかの「主従親族等二拘候類」、「主従親族等二拘候もの之部」などにあって、当時の幕府刑政を特徴づけると考えられる主だった事例を検討することにした。⁽¹⁰⁾

これらの記録から、どのような事件が評定所に諮問されたのか、『公事方御定書』の規定が、どの程度、拘束力を持っていたのか、量刑の基準がどこにあったのか、といったことを窺い知ることができると思われるが、『公事方御定書』

は、寛保二年（一七四二）にひとまず完成し、上下巻の二巻から成り、上巻は、それまでの主だった八一の書付や御触書を収録し、下巻は以前の先例や判例にもとづくルールを法典形式にして編纂し直したもので、手続法や民事規定も含むが、大半は刑罰法規から成るので、刑法典と言うことができる。後の追加も含めて一〇三条に及ぶが、通例、下巻は、「御定書百箇条」と呼ばれている。編纂は、老中松平乗邑を中心に、三奉行が編纂に携わったとされるが、將軍徳川吉宗自身も、積極的に参画し指示を与えており、『公事方御定書』が明律の影響を強く受けているといわれるのも、紀州藩の明律研究が背景にあるからと考えられる。また、『公事方御定書』は、奉行のほかは他見を許さずとしていたから、一般に公示されたものではないが、実際には役人などを通じて、他藩や民間に漏泄していて、各地でその写本を見ることができから、民間の町村役人などにも、ある程度知られていたと言える。また大庄屋などを通じて、幕府や藩の法令などは、大きな枠組みで、博奕の禁止とか、浪人ものへの宿貸しの禁止であるとか、行倒れ者への対応等々のような内容で、村次のようにして、回覧されてきたものを、各村庄屋などが村民を集めて読み聞かせを行うこともあったので、『御定書』のめざしている法規範は、ある程度、くりかえし、民間に教化され、浸透していったことができる。

先の『新律綱領』中の尊長を告発する問題について見れば、『公事方御定書』は、下巻第六五条に、「申掛いたし候者御仕置之事」として、

従前々之例

延享元年極

一、主人・親重き悪事有之由、偽を申懸、訴人に出候もの

磔

「御仕置例類集」に見る親族間の犯罪

延享元年極

一、主人・親之悪事訴出候時之捌 公儀江懸り候重き品ハ、可遂詮議、若訴人申処、偽無之におゐてハ、本人之御仕置相当より一等軽く可相伺之、訴人ハ本人より猶又軽く御仕置可相伺事、

但、右之外、私事訴出候共、不可取上事、

同

一、主人・親、非道之品有之候て、難儀之由申之、宥免之事、願出候ハ、名主・五人組并親類之もの呼出、宜敷、取計候様に可申付事、

という規定を設けている。⁽¹¹⁾

これについて、平松義郎氏は、犯罪捜査の端緒となるべき私人による犯罪の申告は、大いに奨励され、ときに義務づけられていて、知って告げざる者は処罰され、申告者には金銭などの褒美を与え、共犯者を申告した者は、罪を免じたうえ褒賞を授けることが、火付札、切支丹札、徒党札などの高札に公示されていることを指摘するが、「主人、親の犯罪については、これを申告することは原則として禁止せられていた。ただ、主人、親の犯罪が、公儀に關係する重大事件であれば、これを申告すれば、主人、親の刑は一等減輕し、申告者はさらに軽く処罰されるべきものとされてきた。このようなときも、主人、親の犯罪の申告はなお可罰的であつたが、申告することによって、主人、親の刑を減輕して貰うことができることになっており、従者や子は、自分が罰せられても、主人、親に対する減輕の恩典を期待して訴出るべきであつたのである」としている。⁽¹²⁾

なお、本人の御仕置、相当より一等軽く、というのは、石井良助氏によると、死罪及び追放については、「死罪は

遠島重追放、遠島は中追放をもってこれに宛てている⁽¹³⁾。

従前よりの先例として延享元年（一七四四）に決定、採用された、この下巻第六五条は、主人親を重き犯罪を行ったと偽って誣告したケース、偽りでなく真実の告言で、しかも公儀にかかる重大事件であったケース、主人親に非道があったケースをそれぞれ問題にしている、また但し書きにおいて、私事にわたるケースは不受理としているが、それ以外の事例については、とくに取り上げてはいない。

先に言及した『新律綱領』訴訟律「干名犯義」では、既にみたように、一、二等親に限らず、三等親や四等親の尊長についても、子孫や妻妾が告発した事例をあげていて、その範囲は広範囲にわたっており、こうした内容からなる規定は、基本的に、いずれの律系統の法令にも受け継がれているから、江戸幕府の刑政にあっても、そうした系統のなかで考えるべきであろうし、その実情については、さらに『御仕置例類集』などにあたって検討していく必要があるだろう。したがって、下巻第六五条の規定は、刑政の担当者が様々な類例を考量する上での、ひとつの判断基準を示したものとして考えてよいように思われる。

また『新律綱領』は、「干名犯義」とは別に、名例律に、一般的な「親属相為容隠」の規定を置き、以下のように定めている⁽¹⁴⁾。

親属相為容隠

凡同居ノ親属、若クハ別居三等以上ノ親属、及び、外祖父母、外孫、妻ノ父母、女婿、若クハ、孫ノ婦、夫ノ兄弟、及び兄弟ノ妻、並ニ罪ヲ犯シテ相容隠シ、奴婢雇人、家長ノ為メニ容隠スル者ハ、皆論ズルコト勿レ。

若シ官司ノ追補ヲ偵知シテ、其事情ヲ漏泄シ、或ハ消息ヲ通報シ、罪人ヲシテ隠避セシムル者モ、亦罪ニ坐セズ。

「御仕置例類集」に見る親族間の犯罪

其別居四等以下ノ親属、相容隠シ、及ビ事情ヲ漏泄スル者ハ、各凡人二三等ヲ減ズ。

これを見れば、「父は子の為に隠し、子は父の為に隠す」ことが、親族間の具体的な事例について、法令として定められていることを証することができる。もともと、江戸幕府の『公事方御定書』には、相隠関係にある親族について、とくに明示した箇条は見られないから、これもまた、『御仕置例類集』などによって、刑政の実際に当たる必要があるだろう。

こうした律系の規定が、儒教思想にもとづいていることは、あらためて取り上げるまでもないが、『論語』里仁篇第四の一八に、「父母に事えては幾諫す。志の従われざるを見れば、また敬して違わず、勞すれども怨みず」とあり、『礼記』曲礼下に、「子の、親に事うるや、三たび諫めて聴かれずんば、即ち号泣してこれに随う」とあり、諫言して聴かれなければ、親に随い、かつその罪を隠すのが、子としての義務であった。⁽¹⁵⁾

そうした相隠関係にある親族の罪を告言することが許されるケースとして、西田太一郎氏は、第一に、嫡母、継母、慈母が父を殺害した場合や養父母が実父母を殺害した事例、第二には、縁坐の罪及び謀叛、大逆、謀反の事例、第三は、父母・祖父母と子・孫の関係の場合を除いて、財産を侵奪され、その身を殴打されたような事例を挙げられている。先の『新律綱領』の「干名犯義」にも同様の規定があるので参照されたい。⁽¹⁶⁾

また、西田氏は、相隠関係にある親族の罪を発覚前に告言すれば、「自首」と同様に扱われ、本人は罪が許されるか、減輕される場合があるとしているが、告言した者自身は、告言の罪で処罰されることになっていた。⁽¹⁷⁾ また、謀叛など、罪を犯した本人の親族に連帯責任を負わせる縁坐にかかる罪の場合は、むしろ告言が義務づけられており、告言しなければ「不告の罪」に処せられるか、縁坐を免れられないことになっていた。⁽¹⁸⁾ 「不告の罪」を免れるために告

言すれば、不孝の罪となり、告言しなければ、「不告の罪」となるわけであるから、こうした場合、関係者たちが、どのように対処すればよいかは、判断に迷うところだろう。

先の『公事方御定書』下巻第六五条「申掛いたし候者御仕置之事」について、『御仕置例類集』『古類集』のうち、「侍・出家・社人・御用達町人・小もの等之部」に収められている「主従親族等二拘候もの之類」のなかに、本条の適用をめぐる事件を見ることができ⁽¹⁹⁾。寛政三年、大坂西町奉行松平石見守貴弘から、親の身分の者について事実を曲げて讒訴した文光について、「一旦親子の因を結んだうえは、如何様にも取りはからい方もあるのに、そうすることとせず、親子の間柄も隠した上で、親を相手取り讒訴の訴えを起した」として、「死罪」の裁決を行うかどうかという伺いが出されている。

寛政三亥年御渡 大坂(西)町奉行松平石見守(貴弘)伺 親之身分を讒訴いたし候もの一件、城州鞍馬寺大蔵院下願人仲間組頭、長町五丁目、天王寺屋庄蔵借家、松本坊文光

右之もの儀、惠光と一旦親子之因いたし候上は、如何様とも取計方可有之处、無其儀、最初、訴状ニ、親子之訳は押隠、剩、異見之基ニも可相成哉と、願人仲間家業妨ニ不拘、惠光一己之不行跡、不取留風聞而已を、治定ニ申立、其上ニは、不輕儀共も相認、差出候始末、親を相手取、致讒訴候而已ならず、申懸いたし候ニ相当、重々不届至極ニ付、死罪、

〔評定所一座の評議〕

此儀、吟味詰ニ、「不輕儀」と有之候得共、此もの申立候内、外ニ品重キ儀も相見不申、娘同様之ものえ不道之儀、惠光申懸候と申立候儀ニも可有之哉ニ候処、吟味書之趣ニては、是以、不取留儀ニて、「惠光、老衰いたし、

何事も、此もの申聞候儀、不相用、暮方も取締無之、追々身上不如意相成、歎敷身二迫り、外ニ致方無之、吟味之節、奉行所ニて叱りも有之候ハ、異見いたし候発意ニも可相成哉、と愚之心より、親之讒訴ニ相当り候扨と申儀は、更ニ不心附、誠ニ無思慮、不取締之儀共、書出し候事ニて、相巧、惠光ニ咎を為受候存念ニは毛頭無之、吟味之上、不輕儀と心附、今更致後悔候」旨申之、惠光答之趣ハ、此ものより差出候書面ニ、「引当り候程之不行跡いたし候覚、毛頭無之候得共、老年ニおよひ、近頃ハ、別て、物忘等多、七八ヶ年以前より、歩行不相叶、身持不自由ニ付ては、自然と、我儘成儀をも申、血脉ニても無之事故、折々ハ、文光心底ニは不応事も可有之哉と、今更、耻入候由、全、此度、文光申立候趣も、其儀を申立度候処、愚昧之もの、文面等不調法ニ書綴、差出候事故、右躰、吟味ニ相成候段、不便ニ存候間、何卒、赦免之儀相願候」、と有之、右之通、双方申立候ものニ御座候、

『御定書』ニ、「主人・親之悪事訴出候時之捌、公儀ニか、り候重キ品ハ、可遂僉議、若訴人之所申、偽於無之ハ、本人より猶又軽く、御仕置可相伺事、但、右之外、私事訴出候とも、不可取上事」、「主人・親、非道之品有之、難儀之由申之、宥免之事、願出候ハ、名主・五人組并親類之もの呼出し、宜、取計候様ニ可申付」、と有之、

此もの申立候次第ハ、全、公儀ニか、り候儀ニは無之候間、前書之趣ニ候ハ、右御定・但書之方ニ見合、不取上筋ニも可之有哉ニ候得共、一躰、文光出訴之趣は、願人仲間家業妨・出入ニ候処、右願下ケ之趣、聞届候砌、惠光儀、此ものを忤と申候より事起り、家業妨・出入ニ不拘、親子と申訳、相尋候節、惠光不行跡之趣、品々不取留儀を、此もの申立、追々吟味之上ニて、親子之因と申儀并一躰之始末も相分り、

既ニ惠光儀は、去六月、願人仲間組頭、退役いたし、平願人ニ相成居候處、同八月、松本坊より何之不致沙汰、組除いたし候段、申聞、驚入、何故、組除いたし候哉、可相糺と存候得とも、元来、松本坊は、惠光悻と、親子間柄之儀、彼是、及爭論候も、如何之儀、其上、町内之もの共取扱、以来、悻・松本坊より養料銀相渡候約束ニて相済候、と有之、此ものハ、前書之通、身上不如意ニて難儀いたし候故、右之始末および候上ハ、全、双方暮し方、取続ニ差詰候より事起、此もの、不束之儀とも申立候儀と、相聞、其上、願人之身分ハ、吟味書・朱書ニも有之候通、町家見世先忤ニ立、物貰ひ同前之渡世いたし、至て、卑賤之ものニ御座候得は、双方心得違之儀も、事々可有之候間、前書、貳ヶ条目之御定ニ准し、最初ニ、其始末相分り候ハ、寺并組合・親類等え申渡、為取計候筋ニも可有之處、前書之通、追々糺之上ニて、右始末并公儀えか、り候筋ニも無之段、相分候儀ニ付、吟味詰候上之儀ニ候とも、右之通取計、事実并御定書之御趣意ニ相当可申哉ニ御座候間、本寺并組合・親類等呼出、右之趣申渡、宜取計候様、可申付、

〔御差図、死罪〕

とあり、願人仲間の家業を妨害するということで訴えたが、文光の出入の相手は、文光と親子契約を結んでいる惠光であり、惠光は、言われるような不行跡をした覚えはないが、老年になり、物忘れもひどくなって、歩行も困難な有様で、身持ち不自由になって、自然と我儘になり、実際の親子でもない間柄であるから、文光が不満に思うのは尤もで、恥じ入るばかりであると、答弁している。

願人というのは、本人に代わって、寺社に参詣して、ときには水垢離などの祈願も行つたという、代参を稼業にしていたが、その後次第に、店先などで歌い踊る門付芸で、金銭などの施しを受ける大道芸を生業にするようになった

と言われ、願人坊とも称し、鞍馬寺の大藏院末と円光寺末の系統があつて寺社奉行に属したという。⁽²⁰⁾ 文中にもあるように、組頭と平願人からなる集団で活動していたようで、町奉行がここに出てくるのは、大坂市中での門付芸の活動に関わる出入であつたことや、恵光を組から除名するということから町内で騒ぎになり、町役人らが関与したことに⁽²¹⁾よるものと思われる。

しかし、この事件は、文光が親子であることを隠して訴えたことが発覚して大きな問題になつたが、評定所では、『御定書』六五条にある、親の悪事を訴え出たことについて、恵光の不行跡として主張していることは、いずれも取り留めのないことばかりで、公儀にかかる重大な要素もないので、「右御定・但書之方ニ見合、不取上筋ニも可之有哉二候得共」として、但書にある「但、右之外、私事訴出候共、不可取上事」とするか、「本寺并組合・親類等呼出」とあるように、第三項の非道の品ありとして、「名主・五人組并親類之もの呼出、宜敷、取計候様に可申付事」に准ずる決定を考えたようであるが、最終的には、伺いの通り、老中からの御差図で「死罪」という扱いになっている。親を偽って訴えたことが大罪と判断されたということのようであるが、評定所一座では、全体に相当幅のある判断に揺れた感がある。

『公事方御定書』の規定は、一個の基準であり、それだけで法解釈を進めるのは、材料が少ないということから、一旦完成した後も、追加の作業が続けられ、さらに、「御定書ニ添候例書」や「寺社方御仕置例書」、「御書付類」をはじめ、『御定書』編纂時に参考にした記録類を編纂し直した『科条類典』、恩赦の事例を集めた『赦律』などや、今回取り上げる『御仕置例類集』などが、判断材料として重要視されたと考えられる。

三 「依父之科御仕置ニ成候類」

『御仕置例類集』は、現在、第一集から第四集まで残されているが、いずれも冒頭に、「取計之部」を設けている。「取計之部」は、『御定書』の規定や先例などの実際の運用にあたって疑義が生じた場合、それに関する伺いや指令のうち、とくに重要な判断を行った事例を集めたもので、そのうち、「依父之科御仕置ニ成候類」は、父の犯罪により子に縁坐法が適用されるケースについて、運用上、重要な判断がされた類例を含んでいる。

高柳真三氏は、「縁坐は、犯人の一定の範囲内の親族に対し、刑事上の連帯責任を負わせる制度であって、御定書以前においては戦国時代の余風をうけて、主殺親殺のような重罪犯の場合、父母妻子兄弟等にまで処刑がおよぶ例であった」と述べ、その後、吉宗の代に至って、よほど緩和され、町人百姓などでは重罪の場合に子が縁坐に処せられるにとどまったが、「武士に対しては依然旧によって縁坐法が保持された。一般には死刑以上の刑に処せられたものは遠島、遠島に処せられたものは中追放に処せられたが、その親や妻も縁坐させる制が依然伝えられたかは明らかでない」としている。⁽²²⁾

『御定書』第九七条には、

従前々之例

一、御仕置ニ成候もの之悴、遠島追放等ニ申付候もの、幼少故、拾五歳迄親類江預ケ置候処、出家ニいたし度旨、寺院より相願候ハ、伺之上出家に可申付事、

とあり、さらに、幕末の文久二年（一八六二）に制定された『赦律』三〇項「依父之科御仕置相成候もの之事」に、

「御仕置例類集」に見る親族間の犯罪

一、依父之科、遠島、追放申付候もの、年数ニ不拘、赦免可申付事、

一、同拾五歳以下ニ付、親類江預中之もの、年数ニ不拘、赦免可申付事、

として、縁坐に処せられた子の処分を、減輕、緩和する傾向も見られるようになった、といわれている。

「古類集」に収められた「取計之部」の「依父之科御仕置ニ成候類」は、そうしたいいくつかのケースを収載しているので、以下で検討してみたい。

(1) 寛政元酉年、松平越中守殿御書取御渡、父之科ニて忤御仕置之儀ニ付、評議⁽²³⁾、

死刑之もの之忤、是迄、遠島ニ相成候ものも有之、唯今ニ至り候ては、相当とも難思召、一躰、的当之所、如何程ニ可有之哉、評議之品ニ寄候ては、在島又は被仰渡而已ニて有之候もの等は、其儘可差置哉、并父之罪ニより候て之御仕置ニ候得は、叛逆・徒党、重ニ、对上え候て之不屈等之もの之忤は、不携事ニ候とも、又格別たるへき哉之旨、御書取を以、被仰聞候、

〔評定所一座の評議〕

此儀、唯今迄、御家人并侍は、父死刑之忤遠島、遠島之忤中追放と申儀、従前々之例と相見、尤、『御定書』(第九七条)ニ、「御仕置ニ成候もの之忤、遠島・追放等ニ申付候もの、幼年故、拾五歳迄、親類え預け置候処、出家ニいたし度旨、寺院より相願候ハ、伺之上、出家ニ可申付事」と有之ケ条は、御座候得共、何故、死刑之忤は遠島、遠島之忤は中追放ニ相成候と之元極は、相知不申、『科条類典』ニも、相見不申、依之、品々勘弁仕候処、何れえ引当可申品、無御座候間、前例も相当・不相当之处、決着難仕、此度、右刑、御改御座候ニ付候ても、引当可申品、無御座候上は、自己之存寄而已ニ相成、尚以、的当之否、可申上目当、無御座候得共、

先達て被仰聞候、御治世以前之例ニも可有御座之儀をも評議仕候処、其身之科ニて遠島被仰付候もの、御赦ニ付、御免有之候得は、平人ニ相成候処、父之科ニて遠島被仰付候ものは、幼少ニ付、拾五歳迄、御預ケ之もの、出家相願候得は、願之通、被仰付、御赦ニ付、遠島御免之ものも、出家可申付旨、御下知有之候ニ見合候得は、父之科ニよつて之御仕置は、御治世以前之准例ニも可有之哉ニ御座候得共、是以、最初之御趣意、不相知儀ニ付、極候ては、難申上、いつれニも、御静謐之御時節ニ至り候ては、其身之不屈ニよつて之御仕置ニも無之儀に付、御仁慈之御沙汰を以、唯今迄之刑より一等軽く被仰付候方ニも、可有御座哉ニ奉存候、

一、御書取之内、當時在島又は幼年ニ付、拾五歳迄、親類え預ケ置候もの之儀、評議仕候処、前書之通、父之科ニよつて、其子之刑、御改之上、一等軽、被仰付候儀ニ御座候ハ、右在島并御預ケ之もの、ともニ、同様被仰付候方、可然哉ニ奉存、且、徒党并ニ、对上え候て之不屈有之、父御仕置ニ相成候もの之忤は、御書面之通、仮令、忤は其不屈ニ不携候事ニ候とも、旧例ニ御任セ被成候方、可然哉ニ奉存候、

一、忤儀、父之科不諫所を以、御咎重キ儀ニも可有御座哉之段、評議仕候処、諫を父不用節は、親之科、可訴出儀も難仕、父同様御仕置ニ相成候は、子之身分、致方無之儀、其上、幼年之忤迄、御仕置被仰付候を見合候ても、不諫所ニて之御仕置ニは、有御座間敷哉、御家人・侍之儀は、父之科ニて、忤共も引続、重キ御科被仰付、父之科、子え懸り候と申所ニて、親々之慎ニも罷成候故之儀、子之科ニて、父之御咎、無之儀ハ、父は、子之惡事無之様ニ存候は、人情ニ御座候故、教訓も無油断、仕候得は、其子、惡事仕候は、父之存念とは齟齬仕、無是非儀故、子之科、父えは不懸趣ニ申伝を及承候迄ニて、書案も無御座候事故、評議等ニは難申上儀ニ御座候、

一、父死刑之子遠島、遠島之子中追放と之御定は、相見不申候得共、出家願之儀ニ付、本文申上候通、父之科ニて遠島・追放等ニ相成候と申儀ハ、『御定書』ニ有之候間、以来、右より軽く相成候ハ、御定消候様、相成可申哉之趣意も御座候得共、对上え候重キ不屈いたし候もの之忤は、旧例ニ御任セ被置候ハ、強て御定え響候儀も、有御座間敷哉ニ奉存候、

酉六月

死罪遠島もの之忤、御仕置之儀、評議いたし申上候処、御取調之趣と、大意は同様ニ候得共、御仕置等之儀は、符合不致、此上、評議被決候ニは、手間取候間、追て、被遂御評議、緩々、可被仰談、思召にて、此度ハ、只今之通ニ、被成置候積、御評議被決候、然処、改り候評議は、相止ミ候事哉など、可存儀ニ付、右御内評之次第、御書取、為御見被置候趣、御書取、御渡、

(2) 寛政元酉年、松平伊豆守殿御口達、父之科ニて、御仕置被仰付、幼年ニ付、親類え御預ケ之もの、親類身寄無之節、取計之儀ニ付、評議⁽²⁴⁾、

父、死罪・遠島ニ相成候もの之忤、父之科ニよつて、遠島或は中追放等ニ相成候もの、十五歳以下ニて、親類共え預遣可申処、預ケ可申付親類・身寄之もの等、無之時、取計方之儀、評議仕、可申上旨、被仰聞候、

〔評定所一座の評議〕

此儀、父之科ニよつて、遠島・中追放等、被仰付、幼年ニ付、拾五歳迄、親類え御預ケ可被仰付もの、親類・身寄之もの、無之節之例、相見不申候得共、父、江戸払御仕置被仰付、家断絶仕、幼年之娘壹人、有之候処、引取養育可仕親類無之、父之元組世話役え預ケ、扶助米被下候は、別紙類例も御座候、可預親類・身寄之もの

も無之節は、父之元仲ケ間、相組等之内え御預ケ被仰付、右預ケ候ものえ、御手当被下候方ニ、可有御座哉ニ奉存候、

酉閏六月

「評議之通済」

(別紙 略)

松平越中守定信が老中首座に就任したのは天明七年(一七八七)六月であり、松平伊豆守信明が老中に任ぜられるのが天明八年四月である。⁽²⁵⁾ 松平信明は、定信の「寛政の改革」を支え、定信失脚後は、老中首座となり、定信に取り立てられた松平信明ら「寛政の遺老」と呼ばれる老中によって、その後も幕政が主導され、文化一四年(一八一七)に松平信明が死去する頃まで、ある程度、そうした改革の方向は維持されたと言われていることから見ると、右にあげた二つの史料は、松平定信や松平信明が、父の科によって、子が御仕置になる縁坐法について、一定の考えを持っていたことを示している。

定信は、自身の「書取」を「評定所一座」に示し、その「書取」のなかで、御家人・侍の父死刑の際に、忤を遠島刑に処するこれまでの例は、「唯今ニ至り候ては、相当とも難思召」と述べ、それでは、「的当之所、如何程」なのか、処分のあるべき法を検討する必要があるとして、「評定所一座」の評議によつては、すでに刑が執行され、遠島の地にいる受刑者や、言渡しを受けただけで、未だ刑が執行されていない者たちについては、差当り、そのままに差置くべきであるかどうか、さらには、叛逆や徒党の集団を組んで、公儀に対して不届のあった者の子については、たとえその子が事件に関与していなくても、格別であると考えるが、その点どのように処すべきか、そして、それ以外の犯罪の場合、子が事件に関与していないときには、縁坐法を、そもそも適用すべきであるのかどうか、について検討す

るよう命じている。

これに対して、「評定所一座」は「評議書」において、御家人や侍の父が死刑になった倅は遠島、遠島の倅は中追放というのが、従来よりの例であると考えられるが、それでは何故、死刑の者の倅が遠島になり、遠島の倅が中追放になるのか、そもそも最初に、そのように決定した際の判断がどのようなものであったのかは分からず、『科条類典』にも見当たらないので、どのように考えればよいかわからない。本人の科によって遠島を命じられた者について赦免されたり、父の科によって遠島を命じられた倅も、一五歳未満の幼少であれば親戚に預け、その後、寺院への出家を願えば、願の通り命じられ、赦によって遠島御免になった者でも出家を許したことなど、これまでも先例があるが、そもそも最初の趣旨がわからないために、どのように判断すべきかは答えようがない。

しかし、「御静謐之御時節ニ至り候ては、其身之不届ニよつて之御仕置ニも無之儀に付、御仁慈之御沙汰を以、唯今迄之刑より一等軽く被仰付候方ニも、可有御座哉ニ奉存候」として、「御静謐」のご時世になっていることを思えば、本人が関与していない場合であれば、「御仁慈之御沙汰」をもつて、今よりも一等軽く処分することも考えられると述べている。

また、自問自答して、父を子が諫めなかったため、重き咎めを子に科しているとも思われるが、父が子の諫めを用いないのであれば、親を訴えるわけにもいかず、父同様に御仕置になるのは、「子之身分」として、致し方のないこととも考えられるが、幼年の倅まで御仕置を命ぜられることを思えば、子が父を諫めなかったことを理由に、子が処罰されるわけでもないと言える。御家人や侍は、父の科が子に懸かることを思つて、行いを自重するという意図があるとも言え、子の科が父に懸かるということがないのは、子が悪事をしないようにと普段から父が考えるのは人情で

あり、油断なく子どもを教育しているわけであるから、それにもかかわらず、子が悪事に走ったとすれば、父の存念と齟齬することであるが、もはや是非なきことであるので、子の科が父に懸からないという申し伝えを承っている、と述べている。当時の刑政担当者の一定の見解を示していて、興味深い。

しかし、『御定書』には、出家願いとの関係で、父の科により、子が遠島・追放等になるとあり、それより軽く処分をすることになれば、『御定書』の規定は消えてしまうことになるが、公儀に対し重い不届ある者の忤について、旧例通りとすれば、強いて『御定書』に影響することもないと考えられる、と答申している。『御定書』に重大な改変を行う結果になりかねないことを示唆しているものと考えてよいだろう。

松平定信が言うには、「評定所一座」の評議の結論は、定信自身が取調べた趣旨と、大意はほぼ同様であるが、実際の処分のあり方については符合するものではない。この後、さらに評議を行って結論を出すには、相当の日数を要するであろうし、今後、ゆるゆると検討していくとして、今のところは、従来通りとすることに決定することになり、改革の評議は中止になった。

また寛政元年（一七八九）のほぼ同じ時期の(2)について、松平伊豆守信明が口頭で検討を指示したのは、父が死罪、遠島に処せられた忤が、父の科により、遠島や中追放の処分が決定されたものの、一五歳以下は、親類に預けることになっているが、そうした親類や身寄りのない場合に、どのように取り扱うかを評議して申し上げよ、というものであり、これについて、以前の事例が調べられ、父の元仲間、相組みの者に預け、扶助米などの手当を支給した例があり、今後は、それを先例とすることが確認されている。

これらのうち、既にみた(1)の評議書に、「御静謐」云々とあるのは、定信自身の見解を反映したものであるかはわ

からない。しかし、定信が幕府のそれまでの縁坐法について、一定の改革の意思を持っていたことは読み取ることができ、それについては、三浦周行氏も、そのような理解のもとで評価されているところである。⁽²⁶⁾

先の西田太一郎氏によると、旧中国においては、儒学者の間で、罪を犯した本人を処罰しても、その罪は父母兄弟妻子に及ばないとするのが理想であると考えられていたとい⁽²⁷⁾、前漢第八代皇帝昭帝のとき、政府当局者と儒学者の間で行われた討議が、「塩鉄論」として残っていて、政府の「首匿・相坐の法」に儒学者たちが反対したことがわかつているという。「首匿」というのは、「身、謀首と為りて罪人を蔵匿するを言う」とあり、首謀者となって罪人をつくまうことからつけられた名称であるが、首謀者にとどまらず、犯罪事実や犯罪者の所在を知らながらこれを隠して官に告げない者にまで適用され、一家及び隣保の者は犯罪について共同責任を負うべきであるとされた。これに対して、儒者たちは、「首匿・相坐の法」は、「骨肉の恩廢れて、刑罰多し。父母の子におけるは、罪ありと雖も、なおこれを匿す。それ罪に服するを欲せざるのみ。子は父のために隠し父は子のために隠すを聞くも、未だ父子の相坐するを聞かざるなり。……」として反対したということのようである。⁽²⁸⁾ 定信が検討を断念したのは、「評定所一座」の評議に失望したためとも考えられ、定信の改革意図にも、そうした背景を考えておく必要があるのかも知れない。

父の科が子にかかる問題について、その後の評定所の動きを、さらに見てみよう。

(3) 文化二丑年御渡、(南) 町奉行根岸肥前守 (鎮衛) 伺、(二丸御留守居) 榊原太郎右衛門・嫡孫承祖・榊原八十之丞・(八十之丞弟) 榊原四次郎、依父之科、御仕置之儀二付評議⁽²⁹⁾、

右之もの共、実父・榊原彦太夫儀、不届有之、存命二候得は死罪可被仰付もの之旨、被仰渡候付、兩人とも、依父之科、御仕置可被仰付もの二御座候、然ル処、右八十之丞儀ハ、父彦太夫惣領除二相成候後、太郎右衛門

嫡孫承祖相成候ものにて、右躰之もの、父之科、御仕置之儀、再応、取調候処、先例相見不申、寛政五丑年、西国郡代揖斐造酒助元手附、御普請役元メ並、島村紋右衛門、不届有之、遠島被仰付候処、同人忤島村喜太郎儀、中川修理大夫家来ニ被抱、宛行申請、同人在所、豊後国岡表（藩庁は竹田、現大分県竹田市）ニ相勤罷在候、然ル処、御抱もの之忤、父之苗字を名乗、陪臣にて罷在候もの、其父御仕置被仰付候節之例、無御座、陪臣ニ相成罷在候ものに付、御仕置之不及御沙汰儀ニ可有御座候哉、併、他名相続之養子ニ相成候とは違ひ、養子之差別も無御座上は、定例之通、依父之科、中追放可被仰付候哉と、御勘定奉行より相伺候処、喜太郎儀は、御仕置之儀ハ不被及御沙汰旨、被仰渡候、此度之八十之丞儀ハ、右例とも訳違ひ、其上、宝暦五亥年之御書付ニ、嫡孫承祖、相願候節、嫡孫養子と相願候類も間々有之候、以来は都て、嫡孫承祖と相願可申と有之候御趣意をも相考候処、他家之相続いたし候ものニも無之候間、兩人とも、定例之通、依父之科、御仕置可被仰付候哉、依之、此段奉伺候、

〔評定所一座の評議〕

此儀、評議仕候処、嫡孫承祖ハ、養子とは訳違ひ候得共、祖父之跡式は、右嫡孫え被下置候儀にて、惣領除ニ成候もの之父之科有之候ては、右祖父身分ニ取、相当とも難申、養子ニ罷越し候もの、実父重科ニ被仰付候とも、父之科は無之候間、嫡孫承祖も、養子之方に准し、父之科は不被及御沙汰方、可然哉ニ奉存候、尤、榊原八十之丞弟・円次郎儀は、子細無之儀ニ付、定例之通、父之科、御仕置ニ、被仰付候方と奉存候、

丑五月

〔評議之通済〕

「御仕置例類集」に見る親族間の犯罪

として、死罪を命じられた父の子が、すでに惣領から外され、「嫡孫承祖」により、祖父の嫡孫として、祖父の跡式を直接に継承した場合について、他家に養子にいった場合に准じて、縁坐法の適用を免れることを確認しているが、その弟は、「定例之通」、「遠島」となっている。

- (4) 文化三寅年御渡、(北) 町奉行小田切土佐守(直年) 伺、不届有之、出奔いたし候御家人之忤、御仕置有無之儀ニ付評議、⁽³⁰⁾

当九月廿八日、御渡被成候、小田切土佐守・仙石次兵衛相伺候、西丸御持弓同心山梨惣吉、博奕いたし候一件之内、西丸御先手安藤九郎左衛門組同心塚越太兵衛儀も、博奕手合之由、惣吉申立、太兵衛は出奔いたし候ニ付、忤有之候ハ、父之依科、御仕置可被仰付哉、都て右之類、父之科ニて御仕置被仰付可然哉、評議仕、可申上旨、御書取を以被仰聞候、

〔評定所一座の評議〕

此儀、御下ケ被成候例書之内、……、右両例共、当人出奔いたし候処、弥五郎同罪之同心ハ遠島ニ成、忤共ハ御構無之趣を以、相考候得は、父之不届故、罪父之代、御仕置被仰付候趣意ニも可有之哉、……前々より、父、死罪・遠島ニ相成候もの之忤ハ、遠島・追放ニ被仰付、父、追放ニ相成候もの之忤は御咎之沙汰ニ不被及定例ニて、既ニ寛政三亥年、天野八十郎其外之もの共、よみかるたいたし候手合之内、御小性組森川六左衛門儀、病死いたし忤は御仕置之御沙汰不被及例も有之、吟味不相決内、欠落いたし候分、猶、召捕吟味決候迄、遠島ニ可相成哉、又は追放以下ニ可相成哉も難計、然上は、其忤、父之科ニて御仕置被仰付候てハ相当ニ有御座間敷間、右之類、御仕置之不被及御沙汰方、可然哉ニ奉存候、依之、此度之塚越太兵衛、忤有之候とも、父之科

二て御仕置被仰付候筋二は有御座間敷哉二奉存候、

寅十一月

として、出奔して行方知れずになった父の御仕置が定まらないうちは、父の科によって子に御仕置を命ずることはないとしている。

こうした縁坐法の改革の動向を、これ以上検討することは差し控えるが、三浦周行氏も注目された大塩平八郎の遺児をめぐる問題を、やや屋上屋を重ねる感があるが、最後に一瞥しておきたい。⁽³¹⁾

(5) 天保九戌年御渡

一、大坂町奉行跡部山城守組与力大塩格之助養父大塩平八郎次男弓太郎外拾七人、依父之科御仕置之儀、評議、⁽³²⁾

(名前省略)

右は、大塩平八郎其外一味之もの共、別紙伺之通、御仕置御差図有之候ハ、依父之科、弓太郎は死罪、発太郎外拾六人は遠島申付、発太郎、……、(二四名)は、拾五歳迄親類共え預置候様可仕候哉、相伺申候、

戌閏四月

御尋二付、御答書

大坂町奉行跡部山城守組与力大塩格之助養父大塩平八郎次男弓太郎外拾七人、御仕置之儀二付、御尋之廉取調候趣、左之通御座候、

一、大塩平八郎次男弓太郎、依父之科、死罪と申上候処、幼稚二付、御仕置可宥もの二ハ無之哉、且右躰幼稚之もの、死罪二成候例有之候哉、

「御仕置例類集」に見る親族間の犯罪

〔評定所一座の評議〕

此儀、幼稚之もの死罪申付候先例無之、『御定書』御渡以前之旧例等も難相分、尤先達て取調申上候由井正雪始一味之もの共、忤次男等、磔又は死刑ニ被処候内ニハ、七歳未滿之ものも有之候由、世上申伝候得共、是以慥成書留等無之、併今般大塩平八郎企之次第、全叛賊之所業にて、一通り之徒党とハ訳違、可引当先例も無之程之儀ニ付、統合之厚薄ニ寄、親族共迄も夫々被及御沙汰候方ニも可有之哉と取調候処、主謀平八郎ニ限、血統を断候ハ、其余親族之もの共は、別段御宥恕之被及御沙汰候方、寛猛両様之御趣意相立可然哉之見込を以、弓太郎は死罪、一味之もの忤共は、通例磔ニ成候もの之忤、遠島申付候ニ見合、遠島と申上候儀にて、幼稚之もの死刑ニ被処候は、如何ニも歎ケ敷、御尋之趣御尤ニは候得共、平八郎は無此上重キ犯科主謀之ものニ付、其血統を不断候ては、以後之御取締は勿論、懲惡之御趣意も相立申間敷候間、幼稚ニ候とも、弓太郎は矢張死罪被仰付候方、可然哉ニ奉存候、

一、大塩平八郎企ニ一味いたし候もの忤共拾七人は、依父之科、遠島申付、幼少之ものハ、拾五歳迄親類共え預置候積申上候処、右預方之儀、定例と差別有之候哉、且追て出家願等いたし候ハ、是又定例之取扱ニ候哉、

〔評定所一座の評議〕

此儀、平八郎血統之外ハ、格別御宥恕を以、一同死刑を被宥、依父之科、遠島申付、幼年之ものは、拾五歳迄親類共え預置候積相伺候上は、預方ニおゐて別段之取扱ニハ及間敷哉ニ付、弥伺之通御下知有之候ハ、定例之振合にて親類共え預遣候様可仕、尤死刑ニ可被処もの、御宥恕を以、遠島ニ相成候上は、通例依父之科之遠島とは訳違候間、追て出家願いたし候共、御仕置ニ成候もの之忤、遠島追放等ニ申付候もの、幼少故、拾五歳

迄親類え預置候処、出家いたし度旨、寺院より相願候ハ、伺之上、出家可申付事と有之御定え引当、出家ニハ難申付もの二付、弥遠島と御下知相済、親類え預中、出家願いたし候ハ、前書見込之趣を以、取調申上候心得ニ罷在候、

戌七月

去月廿八日御渡被成候、大坂町奉行跡部山城守組与力大塩格之助養父大塩平八郎次男弓太郎、御仕置之儀二付、林大学頭（述斎）等え御尋御答書并別紙とも一覽仕候処、『御定書』ニ明文無之、類例等も無之上ハ、文武天皇御宇撰定有之候律文、又ハ唐明清之律書え引附、弓太郎儀、幼稚之故を以、助命之上、遠島被仰付可然段申上候趣ニ有之、右は無謂存寄ニも無之候得共、一躰刑獄之儀は、其時世ニ随ひ可被行は勿論之儀、當時は『御定書』を以、御仕置を被極、御定箇条ニ難引当品は、先例を探索仕、例は成丈近キを求候様、兼て被仰聞候儀も有之、彼是可見合儀も無之上は、縦令『御定書』御渡以前之旧例ニ候とも、御当代之制法を被追候儀、素より当然ニ可有之、既先達ても申上候通、慶安之度、由井正雪初一味之忤共は、幼稚之もの磔或は死罪ニ相成候由ニ申伝、右刑名之治定は難相分候得共、いづれも死刑ニ被処候段ハ無相違相聞、右躰御当代ニ近キ抛有之候を差置、年古キ書籍ニ基候は、迂遠而已ならず、御政道ニおゐて相当とハ難申、況容易漢土之刑律等ニ引附、今時を可論筋ニは有之間敷、殊弓太郎儀、死を被有候上は、成長後何様之異変有之間敷とも難申哉、右は見越之儀ニは御座候得共、いづれも逆徒之血統ニ候上は、死刑ニ被処、長く其孽を被絶候儀、專要之御所置歟と奉存候、斯迄申上候ても、此上別段之御沙汰を以、縦令同人死刑を被有候とも、一味之もの忤同様遠島被仰付、拾五歳迄親類等え預置候ては、主謀と一味之分際も不相立、且以後之御取締ニも拘可申候間、遠島可申付類、

手放難置故を以、牢舎申付候先例ニ見合、弓太郎儀死罪可申付処、幼稚之儀ニ付、永牢申付候段申渡、大坂表
おゐて、牢舎被仰付候方ニ、可有御座哉と奉存候、

戌八月

林 大学頭

林左近将監

大坂町奉行跡部山城守組与力大塩格之助養父平八郎事、十悪中之企仕候ニ付、其党類迄御吟味之上、夫々御仕
置之儀、懸り奉行中相伺候、其内平八郎次男弓太郎、当戌三歳ニ御座候得共、死罪ニ相決申上候処、幼稚之者
ニ候迎、猶又御尋之趣も有之候所、其父重キ犯科主謀之者ニ付、幼稚ニても、弓太郎ハ、死罪被仰付候方と、
奉行中再忖申上候書面等御下ケ、愚案申上候様との御旨ニ付、左之通申上候、

一、平八郎罪惡、重大勿論ニ候を以て、右次男弓太郎、仮令幼少たりとも、死罪と評決仕申上候書面、反覆熟覽
勘考仕候処、奉行中見込之趣も無余儀相聞申候、然ル処、當時御仕置之『御定書』ニも明文無之、又ハ類例之
見合可相成儀も無之候上は、唐土之律文を参考仕候之外、有之間敷候ニ付、唐明清之律書檢点仕候処、極幼少
縁座之者之明文有之候、其上文武天皇御撰定之律書、中古兵乱にて亡失仕、只今僅計相残り候内ニ、幸ニ其儀
明白相見候得は、右を以て、此節之疑獄御裁決被為在、相当之御儀と奉存候、左候得ハ、弓太郎儀、助命ニて
遠島被仰付候ハ、文武帝之律儀を以て、當時御定書之不足を御補ひ被為在、万世之御法則と被成置可然奉存
候、依之別紙相添、且御下ケ之書面類返上仕、此段申上候、以上、

戌七月

本朝律文

文武天皇御宇始之律令撰定有之候所、令ハ今以全編相伝り、律ハ過半亡佚候て、纔計殘篇伝り候、其内にて御座候、

八十以上。十歳以下。及ヒ篤疾ハ。犯反逆殺人応死者上請。

訳

年八十より上へ十より下之者、およひ重キ病にて生死もはかりかたき者ハ、謀反大逆人を殺すの罪を犯す時も、律の定めにてハ、死罪ニ相違なき者なれども、奉行所にてハ裁断いたさず、伺候て上の裁決ニまかせ候と也、九十以上。七歳以下ハ。雖有死罪。不加刑。〔原注〕縁坐応配没者。不用此律。

訳

年九十より上へ七より下の者ハ、死罪之事ありても、仕置いたし不申と也、これ計にてハ縁座の罪の事明白に無之候を以て、注文を加へ有之候、

原注訳

自分の罪に無之、人の事に因て、仕置を受べきものハ、本文の律文をハ用ひずとなり、其わけハ配とハ没入せられて奴婢となる事に候が、是ハ命にかゝり申さぬ事故、矢張当り前の縁座の仕置に申付候と也、

右、本朝之古法に御座候間、屹と御取用可相成之第一と奉存候、唐律にも此通之事書載有之候、畢竟本朝の律令も、その本ハ唐の律令ニ拠り、潤色して撰定候事故、同様ニ相見へ候筈ニ御座候、その疏議に、礼云、九十曰耄。七歳曰悼。々与耄。雖有死罪不加刑。愛幼養老之義也。と相見へ候て、古昔周の世より既ニ此定ハ立居候事ニ候間、律文もやはり古聖王之道に叶候証を引候にて御座候、将又明律・清律とも追々其時代ニ随ひ、文

「御仕置例類集」に見る親族間の犯罪

段委しく相成候迄にて、大義は少しも替り無御座候、清の王明德が読律佩觸に、縁座の律義仁愛之至を論し候
処、無残所候へとも、事長く候二付、不申上候、以上、

戊七月

「書面弓太郎儀、死罪可申付処、幼稚之儀二付、別段之御宥恕を以、於大坂永牢、宮脇発太郎外拾六人は、伺
之通申付、右之もの共追て出家願等いたし候ハ、其節評議いたし相伺可申旨、右之外親族共ハ、御仕置之
御沙汰ニ不被及段、被仰聞、承知仕候、

戊八月廿一日

評定所一座

大塩弓太郎は、挙兵の前年の天保七年（一八三六）一二月に誕生したというから、この審議が行われた天保九年八月
月という、満年齢では一歳八か月ということになる。

岡本良一氏が掲載された大坂常番与力坂本鉉之助遺稿「咬菜秘記」には、「大塩弓太郎」は、「格之助悻」とあり、
半谷二郎氏は、弓太郎が、「平八郎の子か平八郎の養子格之助の子か判然とはしない」としつつ、平八郎の祖先は、
もともと駿河の今川氏の一族であり、また祖先が徳川家康の面前で手柄をたて、家康手ずから弓を授けたということ
から、子どもに、今川弓太郎と名乗らせた、としている⁽³³⁾。

この評定所の史料については、三浦周行氏が詳しく分析されているが、評定所では、大坂町奉行所からの問合せで、
そもそも弓太郎のような幼稚の者を死罪にした例があるのか、死罪を命じても実際は免除されるのではないか、と聞
いてきたが、そうした先例は見当たらず、『御定書』以前のこともわからないが、由井正雪が起こした慶安の変では、
七歳未満の者も死刑になったと世上で言われており、今回の事件は、そもそも先例のない事件であり、主謀の血統を

断絶しなければ、懲悪の趣意が立たないので、やはり弓太郎については、幼稚の者であっても、死罪を命じるべきであるとしている。

また、今回の事件について問い合わせた林大学頭（述斎）らの答弁書も一覽したが、『御定書』に明文なく、類例もないということから、文武天皇の大宝律令や、唐律、明律、清律などによって弓太郎を助命することを主張し、それは謂れないことではないが、刑獄は、その時世に随い行われるべきで、『御定書』に規定がなくとも、御当代の制法にもとづく必要があると、評定所では反発していることがわかる。

林述斎は、松平定信の信頼を得て幕府の公式の家系譜である『寛政重修諸家譜』の編纂を行うとともに、その後も、幕府の公式記録である『徳川実紀』の編纂、武蔵国の地誌である『新編武蔵風土紀稿』の編纂などを実質的に主導した人物で、幕府のなかでも重く見られ、その意見は尊重されたから、結局のところ、弓太郎は、助命の上、大坂において「永牢」とし、その他の子どもは親類に預け、それ以外の親族は沙汰に及ばないとする決定が老中から「評定所一座」に伝えられた。

四 「女之部」

江戸時代の女性の犯罪について、菅野則子氏が、詳細な分析を行っている。菅野氏は、戦前の司法省において、省所蔵の刑事裁判事例を整理して刊行した『徳川時代裁判事例 刑事ノ部』及び『徳川時代裁判事例 続刑事ノ部』を主な対象として、統計的な分類を行い、そこで取り上げられている全九五六件の裁判事例を詳しく検討するとともに、そのなかの女性の事例七一例すべてについて、どのような行為が処罰の対象になったかを、それぞれの刑罰ごとに特

徴を明らかにしている。⁽³⁵⁾

取り扱ったのは、寛文八年(一六六八)から文久年間(一八六一―六三)まで約二百年間の、「中追放」以上、「引廻之上獄門」までの重罰に処せられた事件であり、それらの検討を通じて、江戸期の女性の犯罪傾向を追跡している。菅野則子氏は、女性が「死罪」という刑罰に処せられた事例について、密通がらみで「死罪」と査定される場合が少なくなく、「死罪」のうち六割余を占めていて、女性への規制のあり方がそれだけ厳しかったと述べるとともに、妻・女房と母・後家では犯罪の態様に違いが見られることなど、興味深い指摘をしている。⁽³⁶⁾

もつとも、それらの事例は、資料の制約もあって、すべて「中追放」以上の重罪であって、かつ、本人が加害者、もしくは犯罪の実行者になった事案であるから、それ以外のケースについては、別に検討する必要がある。⁽³⁷⁾

あらためて本稿が対象にした『御仕置例類集』を見ると、そこにおいても、女性が関係した事件は相当数に上り、たとえば、「等閑又は念忽之部」、「密通之部」などにも見ることができ、『例類集』の大きな目録として、「女之部」としてまとめられている部門があり、ある程度特徴的な犯罪、共通する犯罪として細目録のなかに集められている。いま、それらを一瞥するならば、「古類集」では、「貳拾三之帳」に「女之部」が置かれ、その細目録には、「御関所を除山越いたし候類」、「博奕いたし又は携候類」、「隠売女之類」、「巧事取拵之類」、「火附盜賊之類」、「盜物怪敷品取扱候類」、「人二疵附候類」、「欠落いたし候遊女之類」、「密通又は取持いたし候類」が収載され、さらに「貳拾四之帳」「女之部」には、「不孝不実之類」、「親族等之ために科を犯候類」、「身元不知もの等を差置候類」、「等閑又は不念念忽之類」、「遊女を悪口いたし候迎召仕ニ為縛抱遊女を不残為買揚候もの」を含んでいる。

第二集の「新類集」では、「貳拾三之帳」「貳拾四之帳」が「女之部」であり、「貳拾三之帳」には、「博奕いたし候

もの、「隠売女之類」、「巧事取拵之類」、「盜賊之類」、「盜物怪敷品取扱候類」、「人二疵附候もの」、「欠落いたし候遊女之類」が、「貳拾四之帳」には、「密通又は取持いたし候類」、「不孝不実之類」、「親族等之ために科を犯候類」、「身元不知もの等を差置候類」、「等閑又は不念鹿忽之類」という項目があげられている。

「続類集」の「貳拾八之帳」「女之部」には、「博奕いたし又は携候類」、「博奕其外賭事相催候を不存類」、「隠売女之類」、「火附盜賊之類」、「盜物、怪敷品取扱候類」、「貳拾九之帳」では、「巧事取拵之類」、「巧之始末ハ不存里子等之口入いたし、金錢貰受候類」、「密通いたし候類」、「不孝不実之類」、「非道之取計いたし候類」、「主従、親族等之ために科を犯、又ハ等閑ニいたし候類」、さらに「三拾之帳」は、「自訴并旧悪之類」、「奇怪異説申触候類」、「身元不知もの等差置、又は世話いたし、或は貰受候類」、「捨置間敷儀、等閑又は不念鹿骨類」、「火を鹿末ニいたし、出火および候趣ニ相聞候もの」、「盜物と見込掠取候もの」を収録している。

「天保類集」の「五拾貳之帳」「女之部」では、「御触を背候もの」、「御関所を除山越いたし候もの」、「博奕其外賭事ニ付心附方不行届又ハ右之内品不宜類」、「隠売女之類」、「火附盜賊の類」、「遺恨を以火を鹿末ニいたし候もの」、「盜物怪敷品取扱候類」、「五拾三之帳」に、「巧事取拵之類」、「巧之始末は不存里子等之口入いたし金錢貰受候類」、「密通いたし候類」、「不孝不実之類」、「非道之取計いたし候もの」、「五拾四之帳」には、「主従親族等ニ拘候類」、「自訴并旧悪之類」、「五拾五之帳」に、「奇怪異説申触候もの」、「身元不知ものを差置又は致世話或盜物と不存衣類貰受候類」、「捨置間敷儀等閑又は不念鹿忽之類」、「不筋之取計いたし候類」、「逢強姪候相手を及殺害候もの」、「人倫を乱し候もの」を含んでいる。これらのなかには、他の部門に収められている事件が、その関係者の女性に焦点を当てて処分内容を検討したため、こちらに収録されているものもある。全体的に言えるのは、おおよそ、女性が何らか

の加害者、もしくは犯罪の実行者として立ち現われている事案が収められており、女性が被害者として登場してくるのは、それ以外の部門に入っていることが多いようである。女性の犯罪といった場合、加害者、被害者いずれの局面についても見ていくことが必要であるだろうし、先の菅野則子氏の分析によると、全九五六件のうち、女性の事件は七一例であるから、およそ七・四％であり、犯罪率に見られるジェンダー間の差異は著しいものがあるし、女性が犯罪の犠牲者になっている事例を検討することも、江戸期の犯罪傾向を知る上で重要であるようにも考えられる。

そうしたことを含めて、全体を取り上げることが本稿の課題ではないが、菅野則子氏の分析を参考にしつつ、紙数の関係もあり、親族間の犯罪に関わる問題について、「親族等之ために科を犯候類」あるいは、「主従、親族等之ために科を犯、又ハ等閑ニいたし候類」、「主従親族等ニ拘候類」などのなかから、目についた評議書を紹介するにとどめ、全体の検討は他日を期したい。

「古類集」の「女之部」にある「親族等之ためニ科を犯候類」の冒頭に置かれているのは、次の事案である。

- (1) 明和九年御渡し、御構之場所え立入候一件、大和国式下郡追放人助四郎妻小りん、同源次郎妻つた、所払平八妻(38)きよ。

幕府領である式下郡の村に、追放人である夫を、御構の場所へ立ち入らせ、不埒であるので、居村払いと伺い、評議のところ、『御定書』(八五条)ニ、「御構有之ものを隠し差置候もの、追放ものを隠置候ハ、江戸払、江戸払之ものを隠置候ハ、所払」とあるので、小りん・つたハ江戸払ニ相当り、所払ニ相成候ものを隠置候もの之『御定』の規定はないので、きよハ三十日手鎖ニても可有之候得共、吟味書之趣ニては、「助四郎外貳人之もの共、與風、罷越候ニ付、何之無心付、一宿為致候」と有之。「御構之儀」を乍存、数日隠置候ニも無之、

品輕御座候間、別紙類例二見合、小りん・つたハ三十日手鎖、きよハ急度叱り、

『御定書』二、御構有之ものを隠し差置候もの、追放ものを隠置候ハ、江戸払、江戸払之ものを隠置候ハ、所払、と有之、所払之ものを隠置候もの之御定は無御座、并御仕置ニ成候近キ親族・夫等、御構之地え立入候を、穩便ニいたし候は、難默止筋ニ御座候間、前書御定有之類も、品ニ寄、一二段輕御咎ニ相成、右所払之ものを隠し置候と、御仕置に成候近キ親族・夫等を隠置候ものは、手鎖・押込之内、申付候例有之、……手鎖・押込・過料は、身分相当之御咎ニて、差て輕重は有御座間敷哉ニ奉存候、然共、御咎相成候ものハ、押込より手鎖之方、難儀仕候間、百姓・町人躰にてハ、押込之方輕く御座候間、以来、所払之ものを隠置候もの并御仕置ニ成候近キ親族・夫等を隠置候もの、男は三十日手鎖、女は三十日押込と相極置候ハ、区々ニは相成申間敷哉ニ奉存候、

「評議之通濟」

この事件に就いては、「統類集」一二四九及び一四六一にも、先例として取り上げられているが、『御定書』八五条に追放者が立入り禁止場所に立ち戻ってきた場合に、それを隠し置いた者の処分を定め、江戸払より重い追放人を匿った場合は江戸払い、江戸払いのものを匿った場合は所払いとあるが、所払いのものを匿ったときの規定はないけれども、近い親族や夫などが立ち戻ってきた場合には、穩便にしているのであれば、見ぬふりをするわけにもいかなであろう。品により、一二段輕く処罰することもあり、所払いとかではなく、手鎖や押込、あるいは過料で済ます場合もある。手鎖・押込・過料は、身分に応じて処分を考え、とくにその間に輕重があるわけではないが、手鎖の方が厳しく思うようで、押込となると、百姓・町人などは輕く考えるようであるから、そういうことも考えた処分をす

る必要がある、としている。今回の場合は、三人とも、ふと立ち寄ったのを一宿させただけであるので、悪質ではなく、品軽いものである。類例に見合い、小りん・つたは「三十日手鎖」、きよは「急度叱り」とする。

- (2) 安永三年御渡し、地改赦免之儀二付、及強訴候一件、山下和泉妻きく。⁽³⁹⁾

悴の牛之助に取調べのための吟味があることを承知いたしながら、同人が立ち帰って、自宅に忍び居るのを、訴え出ることもしなかったのは不埒であり、「急度叱り」と処分するか否かを伺ってきた。吟味書によれば、悴の牛之助が立ち帰り、訴え出るべき筋とは存じていたが、不愼に思い隠し置いたということであり、「母子之間」のことでもあり、「請合人も無之、欠落ものを圍置候もの 過料」という『御定書』(四四條)の規定よりは軽く、伺の通り、「急度叱り」とするのが相当とした。

「評議之通済」

- (3) 安永六年御渡し、駿州百姓次郎右衛門盗いたし候一件、次郎右衛門母ちよ。⁽⁴⁰⁾

伯父の三郎右衛門宅に盗みに入り、その後出奔した際も、失踪した者の親族が縁坐などを免れるために「久離」願いを出すときにも、盗みの事実を隠し、また出奔の日付を違えて出すように頼むなど、不埒であるので「所払い」に処すべきかと伺いがあったが、

悴の悪事を、そのまま申し立てれば、御仕置になると思い、押し隠したのは、「母子之間」であれば、余儀なきことであり、『御定書』(第五六條)の「盗人御仕置」に、「盗人を召捕、雑物取返、内証にて逃し遣候もの、当人・名主、叱り」あるが、この者は、御代官所に相違のことを申し立てた不埒もあるので、差当り、例は見当たらないが、「三十日押込」に処する。

「評議之通済」

この事件も、「古類集」二二六八に、伯父の三郎右衛門が「久離」願いに連印するなどして処分された事件に関連するものである。

- (4) 安永七年御渡し、徳左衛門店左市事・伊兵衛、盗いたし候一件、伊兵衛妻さよ⁽⁴¹⁾。

この者は、夫が盗みをしているのを止めさせようとも考えずに、かえって、いっしょになって、盗品の衣類を縫い直すなどして協力しているのは不届きであり、「軽追放」が相当と伺い出されてきた。

此儀、伊兵衛は夫の儀ゆえ、盗みいたし候共、致し方ないことであるが、盗賊の妻子でも、盗みに携わっていないければ、とくに問題はないが、この者は、いっしょに盗物の取捌などしていて、品宜しからず、「江戸払い」とする。

「評議之通済」

こちらにも「古類集」二二八〇に先例として出された例であるが、伺いから見えてくる判断基準と、評定所との違いを窺い知ることができる。

- (5) 寛政六年御渡し、農人橋津国屋初次郎方二居候、同人親五郎兵衛事喜右衛門、人別外ニて罷在候一件、津国屋初次郎、同人同居母すか。⁽⁴²⁾

親である五郎兵衛事喜右衛門、吟味の筋あるところ欠落いたし、所の者え行方尋ねを申し付けていたのに、立ち帰り、病気になったのを、人別帳にも登録せずに、内分に同居させていたのは、不埒であり、伺いでは「所払い」に処するのが相当とした。

「御仕置例類集」に見る親族間の犯罪

別の件で、山口屋儀兵衛の女房が、夫が吟味筋があるにもかかわらず欠落し、奉行所より度々呼び出しを受けたのに、両度にわたって立ち戻ってきたのを、夫の言うままに、町役人にも話さず、押し隠したのは不埒であるとして、「三十日押込」を申し付けた例に見合い、すかは、「三十日押込」、初次郎にとっては、「親の儀」でもあるので、「急度叱り」を申しつける。

(6) 寛政九年御渡し、亀島町吉兵衛、不実之取計いたし候一件、吉兵衛妻せん。⁽⁴³⁾

高齢の藤七が煩っているのに薬も使わず、そのままにしておき、病氣のために立ち騒いで土間に落ちて怪我をするので、甚八というものに頼んだところ、藤七を帯で縛り付けて柱にくくりつけたのを見ていながら、止めることもせず、藤七が死亡すると、貧窮のために、菩提所に埋葬できないとして、火葬札という札を所持している者から借り受けて、子細も聞かずに、火葬にしたのは、不仁なる致し方であり、不届きにつき、「江戸払い」を命ずるべきかを伺ってきた。

藤七が騒いで土間に落ちて怪我をするので甚八に頼んだところ、帯で縛り柱にくくり付け、そのうちに藤七が死亡すると、貧窮で菩提所に埋葬できないとして、火葬札なるものを借り受け、火葬にした。『御定書』(九十三条)に、「煩候旅人、療養も不加、其上宿次ニ送り出し候ニおゐてハ、旅籠屋、所払」とあるのに見合い、旅籠屋とも違い、「女之儀」で、品軽いけれども、一鉢の始末、実意のない取り計らいであり、『御定書』の規定に准じ、「所払い」とする。

親族や身寄りの者との関係で、追放人の妻たちが、立入りが禁じられている御構い場所に立ち戻ってきた夫のために一宿を提供したり、あるいは身内の者をかくまい、逃亡の手助けをするなどして、御仕置を受けることになった事

例である。最後のケースも、吉兵衛の不実を問題にしている中で、妻の行動が注目されたということのように見える。もともと、「旅籠屋」に適用した『御定書』の規定を、それよりも「品軽い」女性に適用するという強引な類推解釈を行っているのは、最初から処罰が前提になっているためのようである。

これらの事件では、女性たちは、自ら事件を引き起こしたというよりも、他律的に巻き込まれて、身内を隠し置き、等閑にしてしまったということであろうか。事情はわからないが、他の選択肢が残されていたようでもないように見える。

幕藩法と女性とに関するこれまでの研究史を概観して、長野ひろ子氏は、女性の問題が家族法のみ分析に限定されてしまったと思われること、法の解釈に力点が置かれ、法の運用や、法と実態との乖離、それらの時期的変化についての検討が少ないこと、幕藩制国家の動揺・解体期における幕藩法の変化と女性の動向について、ほとんど筋道が示されていないことを指摘し、⁽⁴⁴⁾ 家族法における庶民女性の問題、女手形の問題、公娼制度、幕藩制国家動揺期の庶民女性のあらたな動向、天保改革と女性の問題などを取り上げて、『御定書』に見る女性の法的地位、『御仕置例類集』などにみる実態などを検討して、処罰のあり方について、「同じ犯罪行為に対して、男女に差を設ける場合」があり、その根拠は、「女性を男性と同じには法的責任を負うことのできない」、「一人前」に扱えない性とみなしていたから⁽⁴⁵⁾ としている。

その後、幕藩制国家の変質期になると、女性犯罪にも質的变化が現れ、女性の主体的意志によって犯罪が行われるようになり、女性が主体的に男性と変わらないような犯罪をおかした場合には、男と同等の刑に処している判決が見られるようになることを、長野ひろ子氏は指摘している。⁽⁴⁶⁾ そして、こうした刑法的分野での男女の刑罰の平等化は、

社会的責任の平等化にもつながり、女性を「一人前」とみなす考え方に道を開くことにもなるという矛盾に満ちた政策であったと、一定の道筋をつけている。⁽⁴⁷⁾

『御仕置例類集』のうち、とくに「古類集」を中心に分析された曾根ひろみ氏は、判例集全体を見通すと、女性が男性より軽く罰せられる例は多く、「女に御仕置ゆるみ候筋はない」ことが確認されてからも、なお女性を軽く罰している例が数多くあり、「裁判権力が、女性への刑罰を軽くする理由はないと確認しつつ、実際の裁判では女性を軽く罰するという、この矛盾は何に起因しているのであろうか。また、女性ならば、常に軽く罰せられているわけでもない。どのような場合、女性は軽く罰せられるのか」と問題を立てている。⁽⁴⁸⁾ こうして、同一の罪を犯しても、男より軽く処分される場合と、男性並みに罰せられる女性とでは、女性のあり様が大きく異なり、近世において刑事法制が考えている女性は、非力で責任の軽い、従属的な立場の女性であり、自らの意志で罪を犯した、「女らしくない」、「女の身分にあるまじき」⁽⁴⁹⁾ 犯行を行なった女性は、女とは見られず、男性並みに処罰され、「女」として罪を軽減されることはなかったとしている。

また、曾根ひろみ氏は、刑罰の軽重は、性別よりも、「主従」、「親子」、「長幼」の論理の方が、はるかに強く働き、たとえば、主人が男か女にかかわらず、男主人であろうと、女主人であろうと、主人と奉公人という立場が問題にされ、親殺しについても、父殺しより母殺しの方が罪が軽いということは決してなかった、とする。性差よりも、「尊卑長幼」を基本とするのは、中国の「礼制」が、徳川刑政にも反映していることを示している。もつとも、夫婦間では、「法外なる妻」を殺害しても無罪となることがあることを、曾根ひろみ氏は紹介している。⁽⁵⁰⁾ こうしたことを踏まえながら、今少し関係する評議書を検討しよう。

(7) 文政六年御渡し、備中国百姓安兵衛女房まん⁽⁵¹⁾。

夫安兵衛が仁兵衛に雇われ、旅に付添い、立帰って銀子三枚を渡されたのを、そのまま受取り、その後、仁兵衛の変死体が川で発見され、旅に付添った安兵衛も領主役所で取調べられたさい、なぜ夫が銀子を所持していたかは存じないとしても、安兵衛より受け取ったことを申し立てれば、夫が難儀になると思い、隠し通し、安兵衛が奉行所において吟味中、暮らし向きに差支え、渡された銀子も使ってしまったのに、安兵衛が女房に銀子を渡したと供述したのを受けて、再応吟味した際も、一切白状しなかった。「夫之難儀を厭ひ候儀とは乍申、不埒二付、五十日押込可申付哉之段、可相伺候、日数入牢申付置候間、令宥免、御咎之不及沙汰」。

〔評定所一座の評議〕

品よろしからず、伺いの通り、「五十日押込」申し付け、その日数を取調べのため、既に入牢させているので宥免して、御咎めの沙汰に及ばない。

このように隠し通して、夫が先に自首したのを受けて、再吟味しても白状しなかったことが不埒とされ、処分をうけている。最初に見た『新律綱領』にある「親属相為容隠」とは別の規範に従っていることを、ここでも見ることができる。

これまで、女性が罪に問われたケースの一端を見てきたが、以下では、女性が被害者、犯罪の犠牲者になった事件を見てみよう。

(8) 文政六年御渡し、八丁堀次郎吉、養女え疵附候一件。⁽⁵²⁾

次郎吉の店請人である勘太郎倅友次郎が、きんという娘と結婚したいと言うので、娘の実伯母と奉公先的主人

「御仕置例類集」に見る親族間の犯罪

に掛け合い、娘を自分の養女にして、親元になり、友次郎と結婚させた。

ところが、養女さんは「身持ち不埒」として離縁されたため、次郎吉が引取り、その後清九郎のところへ年季奉公へ出したが、勤めを怠って解雇され、前払いの給金を返済するよう要求された。そのため、養女を留五郎という者に月雇に出し、給金三両をもらい、清九郎への返済に充てた。

しかし、留五郎のところでも、養女は大酒を好み勤めようとしなかったので、留五郎から苦情を言われ、給金を返済するよう要求された。そこで次郎吉は養女に期限まで働くよう説得したが、養女はいうことを聞かず、その後も留五郎から給金の返済を求められたが、弁償する方法もなく、無理にでも養女を働かせようと考え、脅しのために包丁を懐中にして、留五郎方へ連れてゆき、説得した。

しかし、どうしても言うことを聞かないばかりか、次郎吉の世話にはならない、勝手にするなどと、法外の挨拶に及んだため、言うことを聞かないなら打ち捨てると脅して、包丁を取り出したところ、かえって悪口を言って、反対に打ちかかってきたので、恩儀を忘れたふりであると思ひ、包丁で疵付け、この疵のため養女は死亡した。

次郎吉は不埒であるので、「三十日押込」が相当と考えられる。

〔評定所一座の評議〕

同様の先例の記録はないが、文化三年根岸肥前守が南町奉行の時、小笠原佐渡守の足輕滝沢真平が、妻の親類の者と偽って、妻の連れ子そでという娘を主人のもとで奉公させたが、長続きせず、家中の者と結婚させたが、身持ち悪く大酒を好み、離縁になって戻ってきた。その後も夫婦の衣類などを盗み出して酒を飲み、女に似あ

わず声高に申し罵るなどして騒ぎ、同僚からも注意され、やむなく知り合いに養育料を払って預けておいたところ、知らぬ間に妊娠したので引き取るよう言われた。妻からは、連れ子を殺して自分も死ぬなどと言われ、連れ子を殺すよう懇願されたため、連れて戻る途中に刀で切りつけ大怪我をさせ、下水に突き落として帰宅した。

そでが不行跡であることは明白であり、やむなく殺害しようとしたことは理解できるが、別の方法もあったのに、往來に連れ出し疵つけ、刀脇差をその場に捨て、屋敷に戻ってから、主人に隠し通そうとした。不埒であるので、「五十日押込」とした類例がある。

この滝沢真平の事件と比較して、次郎吉の事件は、養女さんに身持ちを改めさせようとして、いろいろ意見をして、言うことを聞かないので、包丁で脅して言い聞かせようとしたところ、不法の挨拶をされたので、包丁を取り出して脅すと、かえって悪口をいわれ、反対に打ちかかってきたため、心外に思い、その憤りをはらそうとして養女を疵づけ、そのために死亡した事件である。養女さんは、養われている者に悪口に及び、打ちかかるとした不屈き者であるので、切り殺しても不埒ということはない。しかし、いまだ解雇されていない者を、その者の雇用主である留五郎方で疵つけたのは、主人に対して不束であり、先の滝沢真平の事件よりもはるかに軽く、「急度叱り」。

〔評議の通り済〕

(9) 文政九年御渡、本銀町三丁目善五郎店忠兵衛、不実之取計いたし候一件。⁽⁵³⁾

忠兵衛の妻しけは、洗湯や買物に出ても、遅く帰り、また断りもなしに他行して、酒に酔い帰宅するなどの

「御仕置例類集」に見る親族間の犯罪

ことがあったので、密通をしているのかと忠兵衛が疑い、そのことで喧嘩が絶えなかった。正月二十八日の夜にも、忠兵衛がしつこく問い質し、怒った妻は、疑いを晴らすため自害すると言って、剃刀を咽喉にあてたのを、忠兵衛は止めもしなかったため、妻は咽喉を切り、死んでしまった。しかも吟味の時に、忠兵衛は剃刀を取り上げようとして、もみあいになり、誤って咽喉を切ってしまった、と嘘の供述をした。このように、忠兵衛は不届きであるので、「中追放」が相当と考えられる。

〔評定所一座の評議〕

妻しけは、夫の申し付けをも用いず、密通を行っていると疑われたのも当然のことであり、同様の先例の記録はないが、宝歴十四年駿府町奉行が伺いを立てた事件で、清水本魚町の孫右衛門が、妻の百が家出をしたことについて、結婚以前につきあいがあったという男と密通して、欠け落ちをしたと推量して、所々を捜し、伯父の家にいた妻を見つけ、妻も戻りたいというので、元のように、ともかく同居することになった。ところが、ある時、妻と口論になり、妻が口答えをするので、密通の件は真実であったと思い込み、妻を切り殺した一件で、駿府町奉行の伺いでは「下手人」相当とあったが、評議して「無構」としたが、老中よりの御差図で「急度叱り」として済んだ例がある。

これは、夫に対し口答えをしたため切り殺されたのであるが、今回のしけは、その身の不束より、夫の疑いを受け、弁明もせずに、自害しようとしたものであり、夫は妻が威しのために、そのようなまねをしていると思いい、止めなかったのであるから、御咎めを申し付けるべきものではない。

もつとも忠兵衛が、嘘の供述をしたことは不埒であり、寛政三年根岸肥前守鎮衛が勘定奉行の時、武州の政右

衛門なるものが、女房すめを殺害した事件で、すめが政右衛門の父親への対し方が悪く、政右衛門へも悪口を言うなど不埒のことがあり、そのため殺害したことは御咎めを申し付ける筋はないが、すめの死骸を別の村の河原に埋め、妻が家出をして行方知れずになったなどと嘘を言い触らしたことは不埒であり、「五十日手鎖」を申し付けた先例を参考にして、格別品軽い不埒であるので、「急度叱り」を申し付ける。

〔評議の通り済〕

(10) 文政三年御渡、岡崎町、忠兵衛店文蔵召仕万蔵、主人之妹を及殺害候一件。⁽⁵⁴⁾

万蔵は、主人文蔵の親の代から奉公して、現在も主人の文蔵に召し使われている者であるが、主人文蔵の妹ぎんを殺害し、自らも自害した。子細は不明であるが、主人の妹であるぎんを殺害したことは、重々不届であるので、塩詰の死骸を、晒しの上、磔にするのが相当と思われるが、この件について伺い、ご指令をいただきました。

〔評定所一座の評議〕

この万蔵は、ぎんを殺害して、自らも自害したので、動機が不明瞭であるが、乱心の上で、殺害したとは考えられず、そうであれば、主人を殺し、ただちに自殺したため、子細が分からないケースで、乱心ではないという場合には、『御定書』八七条、重科人死骸塩詰之事により、「死骸御仕置」を行うことが先例となっている。ぎんは、前の主人の娘であるが、また現在の主人の文蔵の妹であるので、「主殺し」の御定より軽く、晒しの上で磔と、榊原主計頭は伺ったのであるが、この万蔵は、前の主人のもとで奉公をはじめ、前の主人の息子である現在の文蔵にも、ひきつづき奉公しているわけであるから、ぎんは、万蔵にとって、主人の娘であること

になり、宝暦四年の幕府の書付に、「今後、主人の妻、主人の忤へ疵附けた者については、主人に疵附けた者
と同一の御仕置を命ぜよ」とあるから、このたびの事件も、これに准じ、「主殺し」と見なすべきで、『御定
書』七一条に従い、塩詰め死骸を、二日晒し、一日引廻し、鋸引きの上、磔にする。

〔評議の通り済〕

(11) 文政九年御渡、岸本武太夫御代官所 撰州西成郡木津村吉兵衛借家、安兵衛⁽⁵⁵⁾。

この安兵衛は、身持ちが良くなく、無宿になっていたが、兄から説諭をうけて、改心して、村に戻ったが、村
の娘そのと深い仲になり、その親にも知らせず、勝手に暮らすようになったので、安兵衛の母親と兄から注
意されたのに立腹して、兄の家に乗り込んで、暴れて諸道具などをこわし、また、そのが病気になったのを介
抱もしないため、安兵衛の母親が見兼ねて看病にいったのを、他の用事を頼み、母親が断わると悪口を言い、
むりやり用事をさせるなどした。さらに、兄に対し生活費を借りたいと申込み、兄が断わると、村から出るな
どと言って騒ぎ立て、兄が押さえ付けようとする、かえって手向かいして、兄を疵附けた。このように、き
わめて不届であるので、「遠島」が相当と考えられるが、ご指令を仰ぎたい。

〔評定所一座の評議〕

安兵衛は、母親に対して不孝をおこなったのであるから、遠島に相当する。

また兄に対し、悪口を言い、諸道具をこわし、兄が取り静めようとしたのに、手向かい、兄の額を疵附けたの
は、故意に疵附けたということではない。したがって、「舅、伯父、伯母、兄弟姉へ疵附けた者は死罪」という
『御定書』の規定には該当しない、と考えるべきである。それゆえ、「遠島」より重くはなく、伺いの通り、

「遠島」とする。

〔評議の通り済〕

(12) 文政六年御渡、相州下九沢村医師隆泉娘いわ、附火いたし候一件、高座郡百姓ニて木挽職いたし候文五郎⁽⁵⁶⁾。

この文五郎は、いわという下九沢村医師隆泉の娘を、いずれ結婚披露をするなどと言って、月雇い奉公人にする意図で引き取り、文五郎の娘のたよと不和になったため、娘のたよを奉公に出すから、それまで実家に戻るようにと言って、いわを実家に帰した。その後、何の音沙汰もないので、医師隆泉の方から平左衛門という人をやつて、どうするつもりかと尋ねたところ、文五郎は、女房にするつもりはないと返答した。

その後になつて、いわ自身が、文五郎宅へ来て、意思を尋ねたが、同様に女房にするつもりはないと返答した。呼び戻すと言って実家に帰しておきながら、「約束」を破つたことを恨みに思い、いわが文五郎宅を放火したことは明白なので、文五郎は、「不埒」であり、「五十日の手鎖」が相当と考えられる。

〔評定所一座の評議〕

この件については、天明四年に、大坂町奉行小田切土佐守が伺つた事件、すなわち、堺屋源藏借家喜八という者が、娘きぬの縁談を進めながら、相手の身持が良くないという理由で、致し方もあつたのに、それもせず、きぬを実家に取り戻し、そのことがもとで口論となり、手疵を受けるといふ事件になり、「不埒」であるので、「急度叱り」と伺い、評議の結果、「伺いの通り」とされ、ご老中に答申して、その通りに処分された類例がある。

今回も、文五郎が娘のたよを説得して、いわとの不和を解消すべきであつたにもかかわらず、それを怠り、か

えつていわを欺き、不実の取り計らいをしたことから、いわが放火をすることになったのであるから、先例と比べて、格別に品宜しくないので、伺いの通り、「五十日の手鎖」。

〔評議の通り済す〕

この最後の事件で、いわは放火犯になったわけであるから加害者には違いないが、評議書にもあるように、婚約者が不実な対応をしなければ、こうした重大な結果は生じなかったに違いない。これら一連の事件を見ると、先の曾根ひろみ氏が、法制上、夫には強固な夫権の存在があり、妻の不服従、不実、不人情などは刑事制裁を科された、「このことは、裁判権力が夫婦、男女のあり方を内面的規範にまで立ち入って律していたことを意味している」と述べていることが参考になるようである。⁽⁵⁷⁾

徳川期の刑法について、これまで、どちらかといえば、客観主義的刑法であると言われ、当時の為政者が、乱心ものや幼年ものなど、是非分別がなく、犯意がないものであっても、その結果の重大性に着目して処罰したことを重視し、犯罪の社会に及ぼす実害や危険性を防止することが目的であると考えられてきたが、今までみてきた評定所一座の議論は、動機などの主観的側面を追跡し、それぞれがその身分に応じたふるまいをしなかったことが克明にたどられて問題にされ、殺されても仕方のないような妻、あるいは養女など不届きものを殺しても罪に問わないということを見ると、曾根氏の言うように、「内面的規範にまで立ち入って律していた」という面も注目する必要があるようである。ただ、実体的に夫に強固な夫権があったと考えるかどうかは、なお今後検討してみたい。

五 「主従親族等二拘候もの之部」

『御仕置例類集』は、評定所一座の評議書を整理収録した記録であるが、それにとどまらず、先例集として、その後の裁判の指標となるものを提供する意図があったことが、その内容から読み取ることができる。そのために、整理上の分類に工夫がほどこされ、身分関係が大きな焦点となる事件については、身分別の編製に入れるとともに、犯罪類型に応じた分類をも行っている。これらの分類のなかに、「主従親族等二拘候もの之部」と分類された、一連の事件群をまとめて収録している部門があり、本稿の「親族間の犯罪」のテーマに多分にかかわる事例を含んでいると思われるので、以下に検討したい。

『御仕置例類集』第一集の「古類集」には、「主従親族等二拘候もの之部」は、「貳拾八之帳」に置かれ、細目録の冒頭は、「主人親子伯父兄弟等之ために不筋之取計いたし候類」にかかわる一五件の評議書を収録している。また、「主人親子兄弟召仕之悪事を隠し又は等閑二いたし候類」の項目には二九件の評議書が収められ、「御構并帳外又は尋之もの等を内分ニて取計候類」は一〇件、「主人又は親之変死を不及力不得助類」は六件、「親族等之変死又ハ疵請候を内証ニて取計候類」が四件、「不孝并主人を蔑ニいたし候類」七件、「目上之人を殺并疵付又ハ可殺旨ニ同意いたし候類」八件、「目下之ものを殺又は疵付候類」五件、「主人之女房娘と密通之類」四件、「祖父之印判盗出し盗物質入に用候もの」一件、「兄之当難を見捨てたく人ニ疵付死ニ為及吟味中手鎖を外し候もの」一件、「無宿ニ成候後兄之宅え這入盗いたし候もの」一件、「遺恨を以兄之宅え火を附候もの」一件、「孫之死骸を旦那寺えも不申聞墓地え為埋候もの」一件、都合九三件の評議書と老中の回答を収録している。

第二集の「新類集」では、「主従親族等二拘候もの之部」は、「貳拾九之帳」に置かれ、ほぼ同様の細目録に分けて、「主人親子伯父兄弟等之ために不筋之取計いたし候類」は一件、「主人親子兄弟召仕之悪事を隠し又は等閑二いたし候類」は一〇件、「御構并帳外又は尋之もの等を内分にて取計候類」について五件、「主人又は親之変死を不存不力不得助類」が一〇件、「親族等之変死又ハ疵請候を内証にて取計候類」三件、「不孝并主人を蔑二いたし候類」三件、「目上之人を殺并疵付又ハ可殺旨ニ同意いたし候類」五件、「目下之ものを殺又は疵付候類」が四件、併せて五一件を収載している。

第三集「続類集」は、「三拾五之帳」にあり、「主人親子伯父兄弟等之ために不筋之取計いたし候類」一四件、「主人并親族之悪事ニ携、又は等閑置候類」一二件、「親族等之変死又は疵請候を、内証にて取計候類」二件、「目上之人を殺、疵付又ハ可殺旨ニ同意いたし、或ハ及不法候類」一〇件、「非道之取計いたし候類」二件、「盗等いたし候得共、親族之訳を以、差別有之候類」二件、「女房を離別可致と、墮胎之薬相用、又は不実之取計いたし候類」二件、「女房及変死候節、右ニ不埒は無之候得共、相違申立候もの」一件、「養女を殺候節、右ニ不埒は無之候得共、外不束有之候もの」一件、「主人同様之もの及鬭諍候節、助力いたし候もの」一件、計四七件を収載している。

最後の第四集「天保類集」では、「六拾壹之帳」及び「六拾貳之帳」に置かれ、「主従親族之ために二科を犯又ハ不筋之取計いたし候類」が一七件、「主人并親族之悪事ニ携又ハ等閑置候類」一八件、「親族等之変死又ハ疵受候を内証にて取計候類」二件、「目上之人を殺疵付又は可殺旨ニ同意いたし或は及不法候類」八件、「非道之取計いたし候類」三件、「盗等いたし候得共親族之訳を以差別有之候もの」一件、「不孝不実之取計いたし候もの」一件、「目上之ものを過チニて殺候類」四件、「目下之ものを殺又ハ疵付候類」四件、「主人之変死を不存、力不及不得助類」二件、「夫婦

相対死仕損候もの」一件、計六一件となっている。

もつとも、親族にかかわるケースは、既にみたように、「侍・出家・社人・御用達町人・小者等之部」や「女之部」にも、「主従親族等二拘候もの之類」として細目録にあげられているが、それ以外にも、別の分類中に含まれていることもあれば、同一の事件が、いずれの関係者に焦点を当てているかにより、それぞれ別の項目のなかに分類されている場合もあるので、正確な実数は、さらに検証する必要があるが、あらためて全体の事件数を概観すると、二五二件にのぼり、表1のようになる。

内容を検討するにあたって、これらの事例すべてを取り上げるとは、紙数の関係で出来ないし、また本稿の課題からしても適当ではないので、これら二三の項目のうち、もつとも件数の多い、「主人親子兄弟召仕之悪事を隠し又は等閑二いたし候類」の六九件を概観することで、当時の江戸幕府の刑政担当者の「親族間の犯罪」に関する捉え方を、ある程度了解できようし、それを通じて、近世日本の幕府法と旧中国の律令法との比較を行う場合にも、ある程度の枠組みを想定することも可能であると思われる。

「主人親子兄弟召仕之悪事を隠し又は等閑二いたし候類」は、文字通り、主人や親子兄弟あるいは奉公人との関係において、その悪事を隠蔽し、あるいは黙認したり、見て見ぬふりをする事、あるいは気づかずに見過ごしたり、見逃す場合までも含む広い範疇であり、積極的に当人の利益のために行った場合から、消極的に犯罪や不正を阻止しなかった場合なども、この中に入れられている。また、第一集の「古類集」に収められている二九例（「古類集」二一六五―二一九三）を通観すれば、第二集以下もほぼ同様の内容であるので、煩を避けるために、本稿では、「古類集」について、その概要を見るにとどめたい。

表1 「御仕置例類集」第1集～第4集

	「主従親族等ニ拘候もの之部」内訳	件数
1	主人親子兄弟召仕之悪事を隠し又は等閑ニいたし候類	69
2	主人親子伯父兄弟等之ために不筋之取計いたし候類	57
3	目上之人を殺并疵付又ハ可殺旨ニ同意いたし候類	31
4	主人又は親之変死を不及力不得助類	18
5	御構并帳外又は尋之もの等を内分ニて取計候類	15
6	目下之ものを殺又は疵付候類	13
7	親族等之変死又ハ疵請候を内証ニて取計候類	11
8	不孝并主人を蔑ニいたし候類	10
9	非道之取計いたし候類	5
10	目上之ものを過チニて殺候類	4
11	主人之女房娘と密通之類	4
12	盗等いたし候得共親族之訛を以差別有之候類	3
13	女房を離別可致と墮胎之薬相用又は不実之取計いたし候類	2
14	祖父之印判盗出し盗物質入に用候もの	1
15	兄之当難を見捨かたく人ニ疵付死ニ為及吟味中手鎖を外し候もの	1
16	無宿ニ成候後兄之宅え這入盗いたし候もの	1
17	遺恨を以兄之宅え火を附候もの	1
18	孫之死骸を旦那寺えも不申聞墓地え為埋候もの	1
19	女房及変死候節右ニ不埒は無之候得共、相違申立候もの	1
20	養女を殺候節右ニ不埒は無之候得共、外不束有之候もの	1
21	主人同様之もの及闘諍候節助力いたし候もの	1
22	不孝不実之取計いたし候もの	1
23	夫婦相对死仕損候もの	1
		計 252

1 見知らぬ者を同道させ、江戸から戻った忤が、婿養子になるとして金四七両を持参し、そのうち二六両を土産として差出し、残り二一両は養子入用金として預かったが、これほどの大金を所持している理由を尋ねたところ、たしかな筋から貰い受けたというので、そのまま受け取った。

その後、忤の風聞悪く、押込みを働いた人物に似ているとも聞き、本人から金子の出所をあらためて確認し怪しければ返却して勘当すべきであるとも忠告されたので、町役人に預かった金子を届けるなどしたが、出所も糺さずに金子を貰い受け、忤のために立ち振舞ったのは、「不埒」であるが、伺いにある「中追放」の処分とまでは言えず、別紙の同様の類例に見合い、「住居の場所並びに江戸御府内を御構い、御神領払い」とし、居町から追放、江戸並びに日光御神領を御構い場所に指定し立入りを禁ずる。

2 忤が奉公先から道具を盗み出し逃走したのを知って、本人に代わって奉公先に弁償し、本人が十分反省したわけでもないのに、奉公口入れの者に、盗みの事実を隠して、別の奉公先の世話を依頼したのは、「親の身分」としては余儀なきことであり、先例は見当たらないが、伺いの通り、「急度叱り」が相当とする。

3 弟は日頃から不埒者であるのを「等閑」にして見過ごしておいたため、養子先を離縁され、元養母を殺害するといった変事も起こったのであるから、兄は「不埒」であり、伺いの通り、「急度叱り」に処する。

4 甥が自宅に盗みに入り、衣類・脇差を盗み取ったことに気付きながら、村役人に届けて、その筋に訴えることもせず、盗まれた脇差が売りに出されたのを知って、内々に買戻し、その後、甥に窃盗の件で疑いがかかり、母親から「久離願」を出すというので、盗みの事実を押し隠し、また出奔した日時を偽って母親と連印で支配役所に申し立てるなど、かたがた「不埒」である。

伺いでは、「過料五貫文」とするが、『御定書』(第五六条、盗人御仕置、寛保四年極め追加)に、「盗人を召捕、雑物取返、内証にて逃し遣し候もの、当人・名主、叱り」とあり、『御定書』に見合い、「叱り」が相当とも考えられるが、御代官所へ偽りを申し立てた「不埒」もあり、「過料錢三貫文」を申し付ける。

5 忤が下女と相対死を企て、その傷のため下女は死亡し、忤は自害仕損じ、生き残ってしまったのを、相対死が発覚すると忤が重く処罰されると考え、下女が自滅したと、領主役人が検死に來た時に偽りを申し、「不届」であり、伺いに「重追放」とあるが、『御定書ニ添候例書』(二五)、「忤取逃致し隠れ居候を乍存、相陳候親、御仕置之事」に引当て、事案は異なるが、「中追放」を申し付け、当人病死しているが、一件の者共に申し渡す。

また、下女の兄も、頼まれて、妹が自滅したと検死役人に申し立てたのは「不埒」であり、『御定書』(第七一条)の「人殺并疵付等御仕置之事」の内、前々よりの例追加に、「邪曲を以、親類縁者、人を殺候儀、内証にて取捨、事済候もの、過料、但、被殺候方之親類も同断」とあることから、「過料」が相当と考えるが、管轄の大坂町奉行が主張するように、妹の相手の忤は、妹にとって主人であり、その主人が重い御仕置になつてはと考え、また忤の親から依頼されたという事情を考えると、伺いの通り、「急度叱り」に処する。

6 寺社の「名目銀」を親が借り受け、連名で加判しながら、その証文の内容もしかと確認せず、親の言いなりに連名加印したのは「不埒」であり、伺いでは「五十日手鎖」とするが、「忤之身分」であれば、強いて親に糺すわけにもいかなないので、御咎めは、「不及沙汰」とする。

別件で、寺院の「祠堂銀」(本堂の修理などのために寄進された金銭を一般に貸し付けて利益を得る、「名目銀」に同じ)を貸し付ける支配人になるよう、親から命じられた者について、親が不埒な貸付を行っていないか、

精々心付けるべきであるのに、そうせず、親が勝手に不埒な取り計らいをしていることに気づかなかったのは「不埒」であり、伺いでは「家財取上げ、所払い」とするが、「忤之身分」として、親のすることを一々監督することができないというのは、理由のないことではない。存命であれば、支配人の地位を取り放ち、「急度叱り」申し付けるべきであるが、本人病死しているので、そのことを、一件の者共に申し渡す。

7 幼少の者を、母の言いつけで家に置き、人別にも加えず、その者が追剥ぎをしたり、盗品を買い取ったりしていることにも気づかないのは「不届」であり、伺いでは「所払い」としたが、家内暮し方まで、すべて母親に従っていて、幼少の者を人別帳に加えなかったのも、母親の取り計らいであり、この者は不行届きというに過ぎない。しかし、「名前人」として、人別帳の筆頭者であるという立場を考えると、「三十日手鎖」に処するものとする。

8 母親が、度々衣類などを持参して、知人から借りたなどと言うのを、心付方もあるべきところ、「等閑」にして見逃したのは「不埒」であり、伺いでは「叱り」とするが、盗品と心付かなかったということであるので、咎めは「不及沙汰」と評議したが、老中の「御差図」により、「叱り」とする。

9 忤は親不孝で、所々で喧嘩をし、所を騒がし、不行跡であるのに、親の示し方よろしからず、異見も加えないのは「不埒」であり、「急度叱り」を申し付けるべきであるが、浦賀奉行より、「不孝不埒之儀、異見を加、不相用候ハ、所役人えも申達、吟味之儀、可相願旨」という文言で申し渡すのは不適當という意見があるので、修正した上で、伺いの通り、「急度叱り」を申し渡す。

10 奉公人が店のなかで盗みをしたと手代が言うので、懲らしめのため縛り付けておくように命じ、幼年の者であ

るから取り計らいの方法もあるのに、自身が病気がちのため、手代に任せきりで、手代が厳しく縛ったため、両手が腫れ上がるなどして、伺いでは「不埒」として、「過料五貫文」とするが、他所で盗んだわけでもなく、親を呼び寄せ証文を取って、奉公人を引き渡し、親から弁償させたということで、『御定書』（第五六条）「盗人を召捕、雑物取返、内証にて逃し遣し候もの、当人・名主、叱り」の規定にも引当て難く、「不念之筋」も見当たらないので、「無構」とする。

11 忤が同村の人間を殺害したのを目撃しながら、大勢で押掛け、もみ合いになって同志打ちで死んでしまったと忤が言い張るので、「親子之恩愛二迷」い、御代官所や大坂町奉行所でも、偽りを申立て、忤を庇ったのは、「不埒」であり、伺いでは「五十日手鎖」とするが、最初、代官万年七郎右衛門手代が検分に来た節には、正直に証言しながら、代官所や大坂町奉行所で、忤が偽りを主張するのに同調し、供述を替えたのは、「親子之恩愛に迷候故」であり、余儀ないことと思われ、例より品軽く、「三十日手鎖」申し付ける。

12 徒党を組んで人を川に突き落として死なせることに同意し、他の者と同調して、現場に行かなかったと偽りを述べ、しかも忤の法外なる致し方にも気づかなかったのは品よろしからず、伺いでは、「本国を構い、中追放」とし、その後病死したので、「死骸取捨て」を申し付ける。

他の仲間の処分との関係をも考慮し、「過料錢五貫文」を申し付けるべきであるが、六十日以上入牢の者であるので宥免し、御咎めは、「不及沙汰」と申し渡すべきところ、本人病死しているので、その旨一件のものに申し渡す。

13 歌舞伎役者の紋を描いた紋付紙を使った賭博があるが、父親がその種の紋付紙を所持しているため、二度にわ

たつて諫めたが、その後は、そのまま捨て置いたため、父親が賭博罪で逮捕された。悴は「不埒」であり、伺いでは「叱り」とするが、父親が子の諫言を用いなければ、「外ニ取計方も有之間敷」なので、「無構」に処する。

14 実父が領主より吟味を受けるため、村預けになったのを、行先も糺さず「等閑」にし、忍び隠れて行方知れずになったのは、不行届で不念であり、伺いは「過料三貫文」とするが、養父との関係もあり、どうにもできなかったことが考えられるが、領主の吟味中のことであつたことから、「叱り」申し付ける。

15 病気のため、商売を父親に任せておいたため、父親が定法に背き、不正の取引を行つて利益を上げたことを知らずにいたのは「不埒」であるが、「悴之身分」では行届きがないこともあると考えられる。不正に使つた紛らわしい商品を没収し、伺いの通り、本人は「三十日押込」に処する。

16 親が幾度か夜盗をしたことを知つた悴が、親に諫言も行つたが、盗品の質入れ、売却を手伝い酒食などに使用したのは「不届」であり、伺いでは「死罪」としたが、親に諫言して用いられなければ致し方ないことでもあるので、再度評議したところ、土屋帯刀が火盗改めるとき、夫の伊兵衛が盗みを働いたのを叱ることもなく、盗品の衣類を売却するために縫い直すなど協力した妻さよについて、「不届」であり、「軽追放」と伺つたところ、評議の結果、「江戸払い」になつた例に見合い、このケースは、親に諫言もしていることから、この例よりは軽く、「所払い」を申し付ける。

17 奉公人が盗みを働いたのが露顕し、早速その向きに訴えるべきところ、そうせずに相手方に弁償して内分にしたのは「不埒」であり、伺いでは「過料三貫文」とするが、『御定書』（第五六条）に、「盗人を召捕、雑物取返、内証ニて逃し遣し候もの、当人・名主、叱り」とあるのに准じ、主人は「叱り」に処する。

同様に、忤が盗みをしたことが露顕したからには、たとえ「忤之儀」であっても、その向きに訴えるべきであるのに、そうせずに当人所持している品を先方に返却し、一部弁償し、残金を用捨してもらい内分にしてもらったのは「不埒」であり、伺いは「過料三貫文」としたが、訴え出なかったのは、「親子之間柄」のことであれば、強いて「不束」ともいいがたく、親について、御咎めは「不及沙汰」とする。

18 兄が盗んだ品を売却したのを知って、売却先より買い戻し、盗まれた者に内分で返却したのは、「弟之身分」として、兄の難儀を知って行ったもので、『御定書』(第五六条)に、「盗人を召捕、雜物取返、内証にて逃し遣し候もの、当人・名主、叱り」に准じ、「叱り」に相当するが、「弟之身分」にて、兄の難儀を知って行ったのであるから、伺いの通り、御咎めは「不及沙汰」に処する。

19 同居の弟が常日頃不行跡であることを心得て、注意もすべきところ、「等閑」にし、そのため、弟が不法を行ったのは、「不埒」であり、伺いでは「三十日手鎖」とするが、弟が家に寄りつかず、帰ってこないのであれば、「不埒」とも言えず、しかし同居の弟をそのまま勝手にさせたのは不行届の取計らいで、「不念」であり、不注意といえるので、「急度叱り」に処する。

20 博奕は、かねてから厳しく御触れも出ていて、弟が博奕を行ったことを知って注意もしたのであれば、なおさら気をつけて、博奕をしないように心掛けるべきであるのに、そうしなかったのは、「不埒」であるが、他所にいる弟に一旦は注意をしているので、「不念」で不注意であり、伺いの通り、「急度叱り」とする。

21 忤が喧嘩の仕返しに行く様子を見て、外出を止めていれば、異変も起こらなかったであろうが、双方に怪我人、死人が出たのは、忤を嚴重に注意せず、「等閑」にしたためであり、「不念」であるので、伺いの通り、「急度叱

り」に処する。

22 当時無宿の倅が難破船と偽って船荷を横領したが、船が難破した様子など、倅の作り話を事実と心得、後難を恐れて倅と出奔し、不届であり、伺いは「国構い、大坂三郷払い」としたが、悪事に携わったわけではなく、後難を恐れて出奔したので、「不束」であるが、一通りの「不束」よりは品よろしからず、「三十日手鎖」申し付けるべきであるが、既に日数入牢し、宥免して、咎は「不及沙汰」段、申し渡すべきところ、病死したので、一件の者に申し渡す。

23 父親が「三笠付け」の宿を営んでいることを家内の者から聞いて、不正のことを止める様に注意し、その後はやっていないと思い、自身は商いに出かけていたが、その留守中に「三笠付け」をしていた。伺いは「急度叱り」とするが、一旦親に諫言しており、「不念」とも言い難く、咎は「不及沙汰」に処する。

「三笠付け」は、江戸時代後期に江戸などで流行した冠付の俳諧の一種。冠となる最初の五文字を三題出して、それぞれに七五を付け、三句一組みにして、点数を争うもの。後に博奕化して禁止されていた。

24 奉公人が店の米を盗み出し売り払ったのを、その奉公人の請人や奉公人の身元保証をした人主から、その代金を米の買主に渡し、その米を買戻して主人に返却して、犯行を知ったからには、内分にするのではなく、その向きへ訴え出るべきなのに、それを怠ったので「不埒」であり、「急度叱り」とすることを火盗改め塩入大三郎より伺ったところ、『御定書』（第五六条）に、「盗人を召捕、雑物取返、内証にて逃し遣し候もの、当人・名主、叱り」とある規定に准じ、「叱り」とする、と評議したが、再度、火盗改めより、御咎め「不及沙汰」かどうかと伺い、他の関係者も処分しているので、主人だけ御咎めがないわけにはいけないので、「叱り」とすると回答

したが、さらに火盜改めより、奉公人は、主人の心次第ということから、「不及沙汰」とあるべきか、と伺い出されたが、奉公人の不届は、主人の意に任せるべきではあるが、すべて内分に済まそうとして、その後、事件が露顕し、吟味となり関係者がいずれも処罰されているので、主人についても、御咎附けるべきである。

25 弟が盗んだ衣類等を預かり、盗品とは知らずとも、弟の奉公先の主人からも、見慣れぬ品を弟が所持して不審に思うと聞いた以上は、弟に出所を糺して糾明し、弟の奉公先の主人にも挨拶に行くのが当然であるのに、それを怠り、盗品を預かり「不埒」であるので、「急度叱り」と伺い出されたが、かつて渡された書付にも、こうした「不埒」があれば、「過料」とあるのに見合い、「過料錢三貫文」を申し付ける。

26 田畑の地代に関わる紛争で忤が殺人を行い、旦那寺と村役人の言うままに金銭を差出し、内々に済ましたのは「不埒」であり、伺いでは「過料錢五貫文」とあるが、忤の殺人を訴え出なかったのは、「親子之恩愛」として理解でき、しかし、言われるままに多額の金銭を差し出したのは、一通りの「不束」よりもよくなく、「過料錢三貫文」申し付ける。

27 牛売買については、印形書付を取り、念入りに売買するよう御触書も出ているのに、兄の盗んだ牛を、盗牛とは知らないにせよ、出所も糺さず、言うままに買い取ったのは、「不埒」であり、伺いは「過料三貫文」とするが、「兄之儀」であり、やむを得ないともいえるが、「不念」であり、「急度叱り」。

28 雇主の下人となった忤が、主人を殺害して欠け落ちして家に戻ってきたのを訴え出ることもなく、そのままにしたのは「不埒」であり、伺いの通り、「五十日手鎖」。

29 身持ち宜しからず勘当して無宿となった忤が、たびたび戻ってきて帰住を迫り、また弟を殴打したにもかかわ

表2 『古類集』「悪事を隠し又は等閑二いたし候類」

	処分の内訳	件数
1	無構	2
2	不及沙汰	6
3	叱り	4
4	急度叱り	10
5	過料銭三貫文	3
6	三十日押込	1
7	三十日手鎖	2
8	五十日手鎖	1
9	所払い	1
10	住居の場所、江戸御構、御神領払い	1
11	中追放	1
	計	32

らず、そのままにしたのは、親、弟とも「不束」であり、伺いの通り、「急度叱り」を申し付ける。

以上見てきたように、「古類集」の「主人親子兄弟召仕之悪事を隠し又は等閑二いたし候類」に収録されている評議書は、二九件にのぼり、このうち、同一の事件のなかで、複数の関係者を処分した評議書が三例あるので、都合、処分件数は三二件になっている。表2に、処分の内訳をあらためて示した。

「無構」「不及沙汰」「叱り」「急度叱り」が、全体の三分の二を占めているのは、親族間のことであるため、特例として不問に付すか、軽い処分になったと考えられる。また本人病死というのが四件あるが、これは取調べのため、入牢中に病死したものであり、12のケースのように、「六十日以上入牢」して病死した場合や、22のように、「三十日手鎖」のところ、「日数入牢」しているので、「不及沙汰」というのは、三〇日以上、牢舎入りしていたことを示している。牢舎は一般に劣悪な環境といわれており、そうした中で苛酷な取調べが行われたため、元々病弱であれば、衰弱死することも考えられる。

なお、処分内容であるが、「叱り」「急度叱り」は、嚴重注意や戒告などの譴責処分に相当する処分である。「過料銭」は、比較的軽い犯罪に科した財産刑であり、一貫文は、

表3 『新類集』「悪事を隠し又は等閑二いたし候類」

	処分の内訳	件数
1	叱り	2
2	急度叱り	3
3	過料銭三貫文	2
4	過料銭五貫文	1
5	三十日手鎖	1
6	軽追放	1
		計 10

表4 『続類集』「悪事二携、又は等閑置候類」

	処分の内訳	件数
1	急度叱り	3
2	過料銭三貫文	4
3	過料銭五貫文	1
4	敲き之上所払い	1
5	市中郷中払い	1
6	敲き之上軽追放	1
7	遠島	1
		計 12

一〇〇〇文、すなわち一文銭千枚。一文銭は穴あき銭であるので、紐に通して使用した。時の両替相場では、金一両は銀六〇匁、また銭四貫文とされた。このうち銀貨は秤量貨幣であり、はかりにかけて、その目方をはかった。一貫文は、現在では約二万円程度と言われている。

「押込」は、他出をさせず、家や室内に閉じ込めて謹慎させるもの。「手鎖」は、手錠をかけて封

印し、五日目ごとに封印を改め、蟄居させる。

「所払い」は、農村部の在方の人間は居村払い、江戸町人は居町払いとした。「中追放」は、武蔵国、山城国、摂津国、和泉国、大和国、肥前国、東海道路筋、木曾路筋、下野国、日光道中、甲斐国、駿河国への立入りを禁じ、同時に属刑（付加刑）として、田畑家屋敷を闕所処分（没収）にした。

第二集の「新類集」以下第三集、第四集の同一の項目も、ほぼ同様の事案で、その処分内容も、さほど変わらない

ので、以下は、処分の内訳を表にしておくにとどめた。

「続類集」の「悪事二携、又は等閑置候類」のうち、もっとも重い「遠島」の刑は、東日本であれば、大島八丈島三宅島などに、西日本であれば、隠岐、杣岐、天草などに流刑に処した。同時に、田畑家屋敷家財闕所という付加刑がつく。

この「遠島」になった事件は、親の差図で人を殺したというもので、『御定書』第七一条「差図を受け人を殺し候もの 遠島」を、そのまま適用している。

「軽追放」は、江戸十里四方、京、大坂、東海道筋、日光、日光道中をお構い場所に指定するとともに、田畑家屋敷を没収する付加刑をつけている。この処分を受けた事件は、忤の悪事に馴れ合い、怪しき品物と気付きながら、自ら盗品の売主になり、代金の内から配分を受けた、というもので、「古類集」「新類集」が、「悪事を隠し又は等閑に置きたし候類」という分類のもとに事件を収録しているのに対し、それとは違って、「悪事二携わり、又は等閑に置き候類」としていることが、事件にも表れている。また「軽追放」という正刑に付加して、「敲き」が付けられているが、「敲き」には、五十敲き、百敲きがある。牢屋門前において、検使役人立会いの上、牢屋同心に敲かせた。

この「続類集」の「主従親族等二拘候もの之部」は、全体で四七件の事件を載せているが、そのうち、最も重い刑罰は、「主殺し」の罪で、「二日晒し、一日引廻し、鋸引き之上、磔」に処した事件であり、文政三年に起きている（「続類集」一四八〇）。すでに本人が自害しているので、『御定書』八七条の規定により、死骸を塩詰めにして、「二日晒し、一日引廻し、鋸引き之上、磔」に処したものである。「鋸引き」というのは、穴を掘って首だけ出させ、その首を、横に立て掛けてある竹鋸で、通行人に引かせる、という残酷な刑罰であるが、江戸後期には、実際、鋸を立

表5 『天保類集』「悪事二携、又は等閑置候類」

	処分の内訳	件数
1	不及沙汰	2
2	急度叱り	9
3	過料銭三貫文	1
4	過料銭五貫文	2
5	五十日手鎖	1
6	所払い	2
7	所払い・江戸構い	1
		計 18

て掛けても、通行人に引かせることはなくなった、といわれている。⁽⁵⁸⁾

「天保類集」の「主従親族等二拘候もの之部」には、全部で六一件の事件を収めるが、こちらにも、天保五年にお渡しにあった「主殺し」の事件で、科人に同一の「二日晒し、一日引廻し、鋸引き之上、磔」という刑罰を科している(「天保類集」一九二八)。また、密通をした妻を、百姓の下人である夫が殺害した事件について、お構いなしとしたケース(「天保類集」一九三八)、さらには、百姓の身分の者ではあるが、実父を毒殺された兄弟が、証拠を集め、毒薬を調査した医師をも突き止めた上で、敵を呼び出し討ち果たして、領主役場に届けた事件(「天保類集」一八九八)があり、弟は構いなし、兄は、そのとき居合わせた敵の十二歳になる子どもを傷つけ死なせたことに対して、敵を討ち果たし本懐を遂げたにもかかわらず、敵でもない幼年者を傷つけ死なせたことで、追放処分としても、立

ち帰ることも予想され、その親族にとって穏やかとは申し難く(「追放等二相成候ては、右親族之もの心底ニおゐても、穏とは難申候」として、天保十年に遠島を命じている。こうした事件での、兄弟の一つ一つの行為に対する判断の積み重ねの上で、結論に持って行く方法が読み取れる評議書になっている。

そうした親族にかかわる事件のなかで、親族の犯罪を隠蔽、あるいは見過ごすような場合についても、肉親であれば、やむなしとして、「無構 構いなし」とした事例もないわけではないが、軽い処分であっても、何らかの処分を

するのが通例であったことがわかる。

そのことは、繰り返しになるが、はじめに見た、明治初年の『新律綱領』などの規定の構想と様相が異なっていることを窺うことができる。

高柳真三氏は、江戸時代には、「子や親が人に殺された事実を知った被害者の親族および村役人等が、これを告訴も告発もせずに内密の取計いを」することがあること、また加害者の親族や村役人らが、犯罪の隠蔽や犯人の逃走に協力するケースも見出せることを紹介しているが、そのようにして犯罪の認知に支障をきたすのであれば、当局者として黙止できない事情があったと考えることができる。⁽⁵⁹⁾なぜ、被害者側や加害者側の親族が犯罪を隠そうとするのか、あるいは犯人の逃走に協力しようとするのかは、別に考えてみる必要があるように思う。

また高柳氏が、幼年者の刑事責任を取り上げて、責任無能力者とされることなく、成年者より一段軽い責任を負わされていることを指摘されているが、当局者の刑政への一定の判断があることを示している。⁽⁶⁰⁾

六 おわりに

「親族間の犯罪」の問題は、古くて新しい問題であり、家族のあり方が、大きな変化の波にさらされている今日にあつては、より重要な意味を持つように思われる。新たな判例の蓄積によって、今後も、あるべき法を模索する作業がつづけられていくに違いない。

日本の近世、そして近代初頭の時期は、中国文化の強い影響下にあつたと言われ、それはその通りであるが、その影響のあり方は、さらにさまざまな分野について、実地にあたつて考えていく必要があるだろう。

先の高柳真三氏に言及したときに触れなかったが、幼年者の刑事責任のところ、寛政八年一二月、老中松平伊豆守の差図により、死罪とされた一五歳以下の幼年者の処分について、減輕して遠島に変更し、それ以降、幼年者に死刑を科すことは宥恕されるべきとされたことが、高柳氏によって紹介されている⁽⁶¹⁾。

寛政八年という、すでに松平定信は失脚しているが、寛政の改革としては、まだつづいていた時期であり、松平伊豆守信明が、「寛政の遺老」として、定信の意思を受け継いで、法の運用についても、一定の改善の方向を目指していたことを示す記録であると考えることができよう。その改革が、その後、どのように展開していくかを探ることも、これまで見てきた史料群から可能であるように思われる。

- (1) 大塚仁、河上和雄、佐藤文哉、古田佑紀編『大コンメンタール刑法』第一〇五条〔仲家暢彦氏による解説〕三三五頁。
- (2) 同、三二六頁。
- (3) 大塚仁『刑法各論』下巻、六三三頁以下。
- (4) 団藤重光『刑法各論』四九頁。団藤重光・平川宗信『刑法各論』(新版) 五七頁。
- (5) 前田雅英『刑法各論講義』第五版、六四三頁。
- (6) 団藤重光氏前掲書。
- (7) 石井紫郎・水林彪編『法と秩序』日本近代思想大系七、二八七頁以下。慶応四年二月に成立した明治新政府最初の刑法典である「仮刑律」訴訟の「干名犯義」も、ほぼ同様に、「凡、祖父母・父母、夫、夫之祖父母・父母之悪事を、子・孫、妻訴へ出る者は答百徒三年、誣る処有るものは刎首。……」としている(同書、三七頁以下)。また「改定律例」は、明治六年六月に布告され、同年七月より施行されたが、「新律綱領」を廃止したものではなく、両者並び施行され、「新律綱領」を敷衍、あるいは部分的に修正するものであり、明治五年一月に「刑法」(旧刑法)「治罪法」が施行されるまで、効力を有することになった。「新律綱領」と「改定律例」の関係は、先の「新律綱領」訴訟の「干名犯義」についていえば、「改定律

例」訴訟律の「干名犯義条例」(第二百四十条)において、「凡子孫、祖父母・父母ヲ誣告シ、妻妾、夫及び夫ノ祖父母・父母ヲ誣告スル者ハ、絞二処スル律ヲ改メ、懲役終身」(同書、二八七頁以下)としていることなどに見られる。

(8) 平松義郎「御仕置例類集」(『国史大辞典』2、所収)。以下の記述は、主として平松氏の解説にもとづいている。

(9) 幕府評定所は、『公事方御定書』上巻一「評定所始之事」によれば、寛永十二年(一六三五)に評定衆が定められ、月三回の式日が設けられたとあり、幕政の基本問題や大名旗本にかかわる事項、複数の管轄にまたがる事項などについて、老中が大目付や三奉行その他を集めて評議させたが、その後、寺社奉行、町奉行、公事方勘定奉行の三奉行が評定所一座を構成して、老中からの諮問に答申し、また「支配違いにかかる出入」の裁判を扱った。享保改革に際しては、評定所門前に目安箱を設置して、直訴や箱訴を認めたことなど、幕政上に占める役割が次第に大きくなっていったことが知られている。

(10) 以下の引用は、石井良助編『御仕置例類集』全一六冊による。第一集の「古類集」、第二集の「新類集」以下第四集の「天保類集」まで、それぞれごとに文書番号が付けられているので、文書の引用は、その類集ごとに行いたい。

(11) 奥野彦六『定本御定書の研究』五三九頁以下。さらに本条には、別に、御褒美を得る目的で偽りの訴人をしたケース、及び人殺しを訴人したケースについての規定を置いている。なお、史料本文にはないが、読みやすさを考えて、適宜、中黒や句読点を付けたほか、改行を行っている場合がある。

なお、『御定書』以前の『御仕置裁許帳』については、塚田孝「近世の刑罰」(『日本の社会史』第五巻所収)を参照されたい。

(12) 平松義郎『近世刑事訴訟法の研究』六〇〇頁以下。

(13) 石井良助「刑罰の歴史」(日本) (同『日本刑事法史』所収) 八六頁。

(14) 石井紫郎・水林彪氏前掲書、一八二頁以下。なお「仮刑律」にも、名例に、「親属相互に容隠」の規定を置き、「凡、祖父母、父母、夫婦、兄弟、子、孫、伯叔父、姉、姪、従兄弟、且夫之祖父母、父母、外祖父母、外孫、妻之父母、女婿、子・孫之婦、夫之兄弟、及兄弟之婦、罪有るに相為に隠し、及び奴僕其家長之ために隠す、皆刑を加へず。其官司之追捕するを漏泄し且消息を通じ、罪人をして隠匿逃避せしむる共、俱に論ぜず(同居に係らば疎遠之親と雖皆坐せず。其他親戚相互に隠す、情によつて臨時論定)。若謀叛以上を犯すに係らば此限にあらず」としている(同書、一二頁)。

また熊本藩「刑法草書」については、小林宏・高塩博編『熊本藩法制史料集』を、各藩刑法については、中沢巷一監修・

「御仕置例類集」に見る親族間の犯罪

京都大学日本法史研究会編『藩法史料集成』、明治初年の刑法史については、手塚豊『明治刑法史の研究』(上)を参照されたい。また旧刑法については、新井勉「旧刑法の編纂」(一)(二)『法学論叢』九八巻一、四号)、本稿との関係から言えば、矢野裕子「旧刑法における『祖父母父母二対スル罪』の成立」(杉山晴康編『裁判と法の歴史的展開』所収)、旧刑法全般については、一九九六年に同志社大学で行われた法制史学会研究大会でのシンポジウム「近代日本の法典編纂——一八八〇年刑法(旧刑法)を再読する——」(『法制史研究』四七所収)が問題点や課題を取り上げている。現行刑法については、さしあたり、吉井蒼生夫「現行刑法の制定とその意義」(杉山晴康編『裁判と法の歴史的展開』所収)を参照されたい。また山中永之佑編『新・日本近代法論』を参照した。

(15) 西田太一郎『中国刑法史研究』一七四頁。

(16) 同書、一七四頁以下。

(17) この点については、「新律綱領」名例律「犯罪自首」及び「改定律例」第五九条以下、「犯罪自首条例」を参照されたい。

(18) 西田氏前掲書、一七五頁以下。

(19) 石井良助編『御仕置例類集』第三冊、五六四頁以下。「古類集」一五九四号。

(20) 願人については、三隅治雄「願人坊」(『国史大辞典』所収)、立川洋「願人坊」(『部落史用語辞典』所収)、また高柳金芳『乞胸と江戸の大道芸』を参照されたい。

(21) 吉田伸之「江戸の願人と都市社会」(塚田孝・吉田伸之・脇田修編『身分的周縁』部落問題研究所、所収)は、寺社奉行関係の記録や鞍馬寺の記録などに当って、願人の実態に迫っている。

(22) 高柳真三『江戸時代の罪と刑罰抄説』三八三頁以下。以下の記述も、同書による。

(23) 「古類集」二〇一。

(24) 「古類集」二〇二。

(25) 「寛政の改革」については、竹内誠『寛政改革の研究』、高澤憲治『松平定信政権と寛政改革』などを参照されたい。

(26) 三浦周行「縁坐法論」(『法制史之研究』所収)。以下の記述は、三浦氏の研究に負う所が多い。

(27) 西田太一郎「縁坐制について」(西田氏前掲書所収)一八三頁以下。

(28) 同前、一八六頁以下。

(29) 「新類集」一〇三。

(30) 「新類集」一〇四。

(31) 三浦周行氏前掲論文、一〇三六頁以下。なお、藤井嘉雄『大坂町奉行と刑罰』にも、大塩平八郎格之助親子の塩詰死骸のことを取上げ、また弓太郎の処分にも言及している(二〇七頁以下)。

(32) 「天保類集」二四一。なお、この所には、シーボルト事件において取調べを受けた高橋作左衛門と、その子である天文方見習、高橋小太郎の処分問題についての評議も収録されている。

(33) 岡本良一『大塩平八郎』、半谷二郎『大塩平八郎——その性格と状況——』などを参照されたい。

(34) 林述斎については、さしあたり、『国史大辞典』などを参照されたい。

(35) 菅野則子「江戸時代における女性の犯罪」(『帝京史学』二二号所収、二〇〇六年)。

(36) 同前、一八三頁以下。

(37) 江戸幕府の処分一覧を「刑典便覧」により、参考までに掲載すると、褒美、叱、急度叱、過怠、過料、軽過料、重過料、療治代、手鎖、入墨、所払、江戸払、江戸十里四方追放、敲、重敲、晒、刺髪、奴、非人手下、押込、隠居、永蟄居、役儀取上、追院、退院、逼塞、閉門、追放、軽追放、中追放、重追放、遠島、死罪、下手人、獄門、火罪、磔となる。また「御定書」の「御仕置仕形之事」では、重い方から順に、鋸挽、磔、獄門、火罪、斬罪、死罪、下手人、晒、遠島、重追放、中追放、軽追放、江戸十里四方追放、江戸払、所払、本罪より一等重き御仕置、本罪より一等軽き御仕置、門前払、奴、追院、退院、一宗構、一派構、改易、閉門、逼塞、遠慮、敲、入墨、戸メ、手鎖、押込、過料、二重御仕置などを取り上げている。

(38) 「古類集」一八三三。なお、地名など、一部省略していることがある。

(39) 「古類集」一八三四。

(40) 「古類集」一八三五。

(41) 「古類集」一八三六。

(42) 「古類集」一八四一。

(43) 「古類集」一八三一。

(44) 長野ひろ子「幕藩法と女性」(女性史総合研究会編『日本女性史』3近世、一九八二年)一六四頁以下。

- (45) 同前、一七六頁。
- (46) 長野ひろ子氏前掲論文、一八一頁以下。
- (47) 長野ひろ子氏前掲論文、一八六頁。
- (48) 曾根ひろみ「日本近世刑事法制のなかの『女』」『近世日本における女性のライフサイクルと地域社会』(『科学研究費補助金研究成果報告書』研究代表者藪田貫、平成二〇年) 八三頁以下。なお、同タイトル、ほぼ同内容のものを、『女性史学』第一八号に掲載している。
- (49) 同前、八六頁。
- (50) 曾根ひろみ氏前掲論文、八六頁以下。
- (51) 『統類集』一二四八。
- (52) 『統類集』一四九六。
- (53) 『統類集』一四九五。
- (54) 『統類集』一四八〇。
- (55) 『統類集』一四八八。
- (56) 『統類集』一四九三。
- (57) 曾根ひろみ氏前掲論文、九一頁。
- (58) 江戸時代の刑罰については、松平太郎『江戸時代制度の研究』、石井良助『江戸の刑罰』、平松義郎『江戸の罪と罰』などを参照いただきたい。
- (59) 高柳真三氏前掲書、一四頁以下。
- (60) 同書、六三頁以下。
- (61) 高柳真三氏前掲書、七四頁以下。なお、幕末の天狗党の乱において、同行した一五歳以下の少年一〇名について、敦賀金ヶ崎の永源寺から助命願があり引き取られたが、水戸藩では、武田耕雲斎の妻や、三歳、九歳の子らが斬首刑になり、その首は獄門にされ、のち取捨てられている(『水戸市史』中巻(五)、五二六頁)。